

# 若菜 下

## 渋谷栄一 訳

### 第一章 柏木の物語 女三の宮の結婚後

#### 「第一段 六条院の競射」

もつともだとは思ふけれども、いまましい言い方だな。いや、しかし、なんでこのような通り一遍の返事だけを慰めとしては、どうして過ごせようか。このような人を介してではなく、一言でも直接おっしゃってください、また申し上げたりする時があるだろうか」

と思うにつけても、普通の関係では、もつたいたなく立派な方だと思ひ申し上げる院の御為には、けしからぬ心が生じたのであろうか。

晦日には、人々が大勢参上なされた。何やら気が進まず、落ち着かないけれども、あのお方のいらっしやる辺りの桜の花を見れば気持ちが悪むだらうか」と思つて参上なされる。

殿上の賭弓は、二月とあつたが過ぎて、三月もまた御忌月なので、残念に人々は思つておられるところに、この院で、このような集まりがある予定と伝え聞いて、いつものようにお集まりになる。左右の大將は、お身内という間柄で参上なされるので、中將たちなども互いに競争しあつて、小弓とおっしゃつたが、歩弓の勝れた名人たちもいたので、お呼び出しになつて射させなされる。

殿上人たちも、相応しい人は、すべて前方と後方との、交互に組分けをして、日が暮れてゆくにつれて、今日が最後の春の霞の感じも気ぜわしく、吹き乱れる夕風に、花の蔭はますます立ち去りにくく、人々はひどく酔い過ぎなさつて、

「しゃれた賭物の数々は、あちらこちらの御婦人方のご趣味のほどが窺えようというものを。柳の葉を百発百中できそつな舎人たちが、わがもの顔をして射取るのは、面白くないことだ。少しおつとりした手並みの人たちこそ、競争させよう」

「といつて、大將たちをはじめとして、お下りになると、衛門督、他の人より目立つて物思ひに耽つていらっしやるので、あの少々は事情をご存知の方のお目には止まつて、

「やはり、様子が変だ。厄介な事が引き起こるのだろうか」

と、自分までが悩みに取りつかれたような心地がする。この君たち、お仲が大変に良い。従兄弟同士という中でも、気心が通じ合つて親密なので、ちよつとした事でも、物思ひに悩んで屈託しているところがあるものなら、お気の毒にお思ひになる。

自分でも、大殿を拝見すると、何やら恐ろしく目を伏せたくなるようで、「このような考えを持つてよいものだろうか。どうでもよいことでさえ、不行き届きで、人から非難されるような振る舞いはすまいと思つたものを。まして身のほどを弁えぬ大それたことを」

と思ひ悩んだ末に、

「あの先日の猫でも、せめて手に入れたい。思ひ悩んでいる気持ちを打ち明ける相手にはできないが、独り寝の寂しい慰めを紛らすすすがにも、手なづけてみよう」

と思つと、氣違ひじみて、どうしたら盗み出せようか」と思つたが、それさえ難しいことだつたのである。

#### 「第二段 柏木、女三の宮の猫を預る」

弘徽殿女御の御方に参上して、お話などを申し上げて心を紛らわそうとしてみる。たいそう嗜み深く、氣恥ずかしくなるようなご応対ぶりなので、直にお姿をお見せになることはない。このような姉弟の間柄でさえ、隔てを置いてきたのに、思ひがけず垣間見したのは、不思議なことであつた」とは、さすがに思われるが、並々ならず思ひ込んだ気持ちゆえ、軽率だとは思われぬ。

東宮に参上なさつて、当然似ていらつしやるところがあるだろう」と、目を止めて拝すると、輝くほどのお美しさのご容貌ではないが、これくらいのご身分の方は、また格別で、上品で優雅でいらつしやる。

内裏の御猫が、たくさん引き連れていた仔猫たちの兄弟が、あちこちに貰われて行って、こちらの宮にも来ているのが、とてもかわいらしく動き回るのを見ると、何よりも思ひ出されるので、

「六条院の姫宮の御方におります猫は、たいそう見たこともないような顔をしていて、かわいらしうございませう。ほんのちよつと拝見しました」と申し上げなされると、猫を特におかわいがりあそばさすご性分なので、詳しくお尋ねあそばさす。

唐猫で、こちらのととは違つた恰好をしてございました。同じようなものですが、性質がかわいらしく人なつつかいのは、妙にかわいいものでございます」

などと、興味をお持ちになるように、特にお話し申し上げなされる。お耳にお止めあそばして、桐壺の御方を介してご所望なされたので、差し上げなされた。なるほど、たいそうかわいらしげな猫だ」と、人々が面白がるので、衛門督は、手に入れようとお思ひであつた」と、お顔色で察していたので、数日して参上なさつた。

子供であつたころから、朱雀院が特別におかわいがりになつてお召し使ひあそばしていたので、御入山されて後は、やはりこの東宮にも親しく参上し、お心寄せ申し上げていた。お琴などをお教え申し上げなされるついでに、御猫たちがたくさん集まっていますね。どうしたかな、わたしが見た人は」と探してお見つけになつた。とてもかわいらしく思われて、撫でていた

東宮も、

「なるほど、かわいい恰好をしているね。性質が、まだなつかないのは、人見知りをするのだろうか。ここにいる猫たちも、大して負けないがね」とおつしやるので、

「猫というものは、そのような人見知りは、普通しないものでございますが、その中でも賢い猫は、自然と性根がございませう」などとお答え申し上げて、これより勝れている猫が何匹もございませうですから、これは暫くお預かり申しませう」

と申し上げなされる。心の中では、何とも馬鹿げた事だと、一方ではお考えになるが、この猫を手に入れて、夜もお側近くにお置きなされる。

夜が明ければ、猫の世話をして、撫でて食事をさせなされる。人になつかなかつた性質も、とてもよく馴れて、ともすれば、衣服の裾にまつわりついて、側に寝そべつて甘えるのを、心からかわいいと思う。とてもひどく物思ひに耽つて、端近くに寄り臥していらつしやる。やつて来て、ねよう、ねよう」と、とてもかわいらしげに鳴くので、撫でて、いやに、積極的だな」と、思わず苦笑される。

「恋いわびている人のよすがと思つてかわいがつていっていると、どういつつもりでそんな鳴き声を立てるのか、これも前世からの縁であるうか」

と、顔を見ながらおつしやる。ますますかわいらしく鳴くので、懐に入れて物思ひに耽つていらつしやる。御達などは、

「奇妙に、急に猫を寵愛なされるようになったこと。このようなものはお好きでなかつたご性分なのに」

と、不審がるのだつた。宮から返すようにとご催促があつてもお返し申さず、独り占めして、この猫を話相手にしていらつしやる。

「第三段 柏木、真木柱姫君には無関心」

左大将殿の北の方は、大殿の君たちよりも、右大将の君を、やはり昔のままに、親しくお思ひ申し上げていらつしやる。氣立てに才氣があつて、親しみやすいくいらつしやる方なので、お会いなされる時々にも、親身に他人行儀になるところはなくお振る舞いになるので、右大将も、淑景舎などが、他人行儀で近づきたいお扱ひであるので、一風変わったお親しさで、お付き合ひしていらつしやる。

夫君は、今では以前にもまして、あの前の北の方とすつかり縁が切れてしまつて、並ぶ者が無いほど大切にしていられつしやる。このお方の腹には、男のお子たちばかりなので、物足りないと思つて、あの真木柱の姫君を引き取つて、大切にお世話申したいとお思ひになるが、祖父宮などは、どうしてもお許しにならず、

「せめてこの姫君だけでも、物笑いにならぬように世話しよう」

とお思いになり、おっしゃりもしている。

親王のご声望はたいそう高く、帝におかせられても、この宮への御信頼は、並々ならぬものがあつて、こうと奏上なさることはお断りになることができず、お気づかい申していらつしやる。だいたいのお人柄も現代的でいらつしやる宮で、こちらの院、大殿にお次ぎ申して、人々もお仕え申し、世間の人々も重々しく申し上げているのであつた。

左大將も、将来の國家の重鎮とおなりになるはずの有力者であるから、姫君のご評判、どうして軽いことがあるうか。求婚する人々、何かにつけて大勢いるが、ご決定なさらない。衛門督を、そのよつな、態度を見せたら「とお思いのようだが、猫ほどにはお思いにならないのであろうか、まつたく考えもしないのは、残念なことであつた。

母君が、どうしたことが、今だに變な方で、普通のお暮らしぶりではなく、廢人同様になつていらつしやるのを、残念にお思いになつて、繼母のお側を、いつも心にかけて懂れて、現代的なご気性でいらつしやるのだった。

#### 「第四段 真木柱、兵部卿宮と結婚」

蛸兵部卿宮は、やはり独身生活でいらつしやつて、熱心にお望みになつた方々は、皆うまくいかなくて、世の中が面白くなく、世間の物笑いに思われると、「このまま甘んじていられない」とお思いになつて、この宮に気持ちをお漏らしになつたところ、式部卿大宮は、

「いや何。大切に世話しようと思つ娘なら、帝に差し上げる次には、親王たちにもあわせ申すのがよい。臣下の、真面目で、無難な人だけを、今の世の人が有り難がるのは、品のない考え方だ」

とおっしゃつて、そつ大してお焦らし申されることなく、ご承諾なさつた。蛸親王は、あまりに口説きがいのないのを、物足りないとお思いになるが、大体が軽んじ難い家柄なので、言い逃れもおできになれず、お通いになるようになった。たいそうまたとなく大事にお世話申し上げなさる。

式部卿大宮は、女の子がたくさんいらつしやつて、

「いろいろと何かにつけ嘆きの種が多いので、懲り懲りしたと思いたいとこるだが、やはりこの君のことが放つておけなく思えてね。母君は、奇妙な

変人に年とともになつて行かれる。大將は大將で、自分の言う通りにしないからと言つて、いい加減に見放ちなされたようだから、まことに氣の毒である」

と言つて、お部屋の飾り付けも、立つたり座つたり、ご自身でお世話なさり、すべてにもつたいなくも熱心でいらつしやつた。

#### 「第五段 兵部卿宮と真木柱の不幸な結婚生活」

宮は、お亡くなりになつた北の方を、それ以来ずっと恋い慕い申し上げなつて、ただ、亡くなつた北の方の面影にお似申し上げたよつな方と結婚しよう」とお思いになつていたが、悪くはないが、違つた感じでいらつしやる」とお思いになると、残念であつたのか、お通いになる様子は、まこと億劫そうである。

式部卿大宮は、まつたく心外なことだ」とお嘆きになつていた。母君も、あれほど變つていらつしやつたが、正氣に返る時は、口惜しい嫌な世の中だ」と、すつかり思いきりなさる。

左大將の君も、やはりそうであつたか。ひどく浮氣つばい親王だから」と、はじめからご自身お認めにならなかつたことだからであらうか、面白からぬお思いでいらつしやつた。

尚侍の君も、このように頼りがいのないご様子を、身近にお聞きになるにつけ、そのよつな方と結婚をしたのだつたら、こちらにもあちらにも、どんなにお思いになり御覽になつただらう」などと、少々おかしくも、また懐かしくもお思い出しになるのだった。

あの當時も、結婚しようとは、考えてもいなかったのだ。ただ、いかにも優しく、情愛深くお言葉をかけ続けてくださったのに、張り合ひなく軽率なよつに、お見下しになつたであらうか」と、とても恥ずかしく、今までもお思い続けていらつしやることなので、あのような近いところで、わたしの噂をお聞きになることも、氣をつかわねばならない」などとお思いになる。

こちらからも、しかるべき事柄はしてお上げになる。兄弟の公達などを差し向けて、このよつなご夫婦仲も知らない顔をして、親しげにお側に伺わせたりなどするので、氣の毒になつて、お見捨てになる氣持ちはないが、

大北の方という性悪な人が、いつも悪口を申し上げなされる。

「親王たちは、おとなしく浮気をせず、せめて愛して下さるのが、華やかさが無い代わりには思えるのだが」とぶつぶつおっしゃるのを、宮も漏れお聞きなされては、まったく変な話だ。昔、とてもいとしく思っていた人を差し置いて、やはり、ちょっとした浮気はいつもしていたが、こう厳しい恨み言は、なかったものを」

と、気に入らなく、ますます故人をお慕いなさりながら、自邸に物思いに耽りがちでいらつしやる。そうは言いながらも、二年ほどになったので、こうした事にも馴れて、ただ、そのような夫婦仲としてお過ごしになつていらつしやる。

## 第二章 光る源氏の物語 住吉参詣

### 「第一段 冷泉帝の退位」

これという事もなくて、年月が過ぎて行き、今上の帝、御即位なさつてから十八年におなりあそばした。

「後を嗣いで次の帝におなりになる皇子がいらつしやらず、物寂しい上に、寿命がいつまで続くか分からない気がするので、気楽に、会いたい人たちと会い、私人として思うままに振る舞つて、のんびりと過ごしたい」

と、長年お思いになりおっしゃりもしていたが、最近たいそう重くお悩みあそばすことがあつて、急に御退位あそばした。世間の人は、惜しい盛りのお年を、このようにお退きになること」と、惜しみ嘆いたが、東宮もご成人あそばしているのです、お嗣ぎになつて、世の中の政治など、特別に変わることもなかった。

太政大臣は致仕の表を奉つて、ご引退なさつた。

「世間の無常によつて、恐れ多い帝の君も、御位をお下りになつたのに、年老いた自分が冠を掛けるのは、何の惜しいことがあるつか」

とお考えになりおっしゃつて、左大將が、右大臣におなりになつて、政務をお勤めになつたのであつた。承香殿女御の君は、このような御世にお会

いにならず、お亡くなりになつたので、規定のご称号を奉られたが、光の当たらぬ感じがして、何にもならなかつた。

六条院の女御腹の一の宮、東宮におつきになつた。当然のこととは以前から思つていたが、実現して見るとやはり素晴らしく、目を見張るようなことであつた。右大將の君、大納言におなりになつた。ますます理想的なお間柄である。

六条院は、御退位あそばした冷泉院が、御後嗣がいらつしやらないのを、残念なこととご心中ひそかにお思いになる。同じ自分の血統であるが、御煩悶なさることなくて、無事にお過ごしなつただけに、罪は現れなかつたが、子孫まで皇位を伝えることができなかつた御運命を、口惜しく物足りなくお思いになるが、人と話し合えないことなので、気持ちが晴れない。

東宮の母女御は、御子たちが大勢いらつしやつて、ますます御寵愛は並ぶ者がいない。源氏が、引き続き皇后におなりになることを、世間の人は不満に思つているのにつけても、冷泉院の皇后は、格別の理由もないのに、強引にこのようにして下さつたお気持ちをお思いになると、ますます六条院の御事を、年月と共に、この上なく有り難くお思い申し上げになつていらつしやつた。

院の帝は、お考えになつていたように、御幸も、気軽にお出かけなさつたりして、御退位後はかえつて、確かに素晴らしく申し分ない御生活である。

### 「第二段 六条院の女方の動静」

姫宮の御事は、帝が、御配慮になつてお気をつけて差し上げなされる。世間の人々からも、広く重んじられていらつしやるが、対の上のご威勢には勝ることがおできになれない。年月がたつにつれて、ご夫婦仲は互いにたいそうしつくりと睦まじくいらして、少しも不満なところなく、よそよそしさもお見えでないが、

「今は、このような普通の生活ではなく、のんびりと仏道生活に入りたい、と思ひます。この世はこれまでと、すっかり見終えた気がする年齢にもなつてしまいました。そのようにお許し下さいませ」

と、真剣に申し上げなされることが度々あるが、

「とんでもない、酷いおっしやりようです。わたし自身、強く希望するところですが、後に残って寂しいお気持ちかなさう、今までと違つたようになりになるのが、気がかりなばかりに、生き永らえているのです。とうとう出家した後に、どうなりとお考え通りになさるがよい」

などとばかり、ご制止申し上げなさる。

女御の君、ひたすらこちらを、本当の母親のようにお仕え申し上げなさうて、御方は陰のお世話役として、謙遜していらつしやるのが、かえつて、將來頼もしいで、立派な感じであつた。

尼君も、ややもすれば感激に堪えない喜びの涙、ともすれば、落とし落として、目まで拭い爛れさせて、長生きした、幸福者の例になつていらつしやる。

### 「第三段 源氏、住吉に参詣」

住吉の神に懸けた御願、そろそろ果たそうとなさうて、春宮の女御の御祈願に参詣なさうとして、あの箱を開けて御覧になると、いろいろな盛大な願文が多かつた。

毎年の春秋に奏する神楽に、必ず子孫の永遠の繁栄を祈願した願文類があるほど、このような威勢でなければ果たすことがおできになれないように考へていたのであつた。ただ走り書きしたような文面で、学識が見え論旨も通り、仏神もお聞き入れになるはずの文意が明瞭である。

「とつしてあのような山伏の聖心で、このような事柄を思いついたのだらう」と、感服し分を過ぎたことだと御覧になる。「前世の因縁で、ほんの少しの間、仮に身を変えた前世の修行者であつたのだらうか」などとお考えめぐらすと、ますます軽んじることができなかつた。

今回は、この趣旨は表にお立てにならず、ただ、院の物語でとしてご出立なさる。浦から浦へと流離した事変の当時の数多くの御願は、すっかりお果たしなかつたが、やはりこの世にこつお栄えになつていらつしやつて、このようないろいろな栄華を御覧になるにつけても、神の御加護は忘れることができず、対の上もこ一緒申し上げなさうて、ご参詣あそばす、その評判、大変なものである。たいそう儀式を簡略にして、世間に迷惑があつて

はならないように、と省略なさるが、仕来りがあることゆゑ、またとない立派さであつた。

### 「第四段 住吉参詣の一行」

上達部も、大臣お二方をお除き申しては、皆お供奉申し上げなさる。舞人は、近衛府の中將たちで器量が良く、背丈の同じ者ばかりをお選びあそばす。この選に漏れたことを恥として、悲しみ嘆いている芸熱心の者たちもいるのだつた。

陪従も、岩清水、賀茂の臨時の祭などに召す人々で、諸道に殊に勝れた者ばかりをお揃えになつていらつしやつた。それに加わつた二人も、近衛府の世間に名高い者ばかりをお召しになつてゐるのだつた。

御神楽の方には、たいそう数多くの人々がお供申していた。帝、東宮、院の殿上人、それぞれに分かれて、進んで御用をお勤めになる。その数も知れず、いろいろと善美を尽くした上達部の御馬、鞍、馬添、隨身、小舎人童、それ以下の舎人などまで、飾り揃えた見事さは、またとないほどである。

女御殿と、対の上は、同じお車にお乗りになつていた。次のお車には、明石の御方と、尼君がこつそりと乗つていらつしやつた。女御の御乳母、事情を知る者として乗つていた。それぞれお供の車は、対の上の御方のが五台、女御殿のが五台、明石の一族のが三台、目も眩むほど美しく飾り立てた衣装、様子は、言つまでもない。一方では、

「尼君をば、とつせなら、老の波の皺が延びるように、立派に仕立てて参詣させよう」

と、院はおつしやつたが、

「今回は、このような世を挙げての参詣に加わるのも憚られます。もし希望通りの世まで生き永らえていましたら」

と、御方はお抑えなさうたが、余命が心配で、もう一方では見たくて、付いていらつしやつたのであつた。前世からの因縁で、もともとこのようにお栄えになるお身の上の方々よりも、まことに素晴らしい幸運が、はっきり分かるご様子の方である。

「第五段 住吉社頭の東遊び」

十月の二十日なので、社の玉垣に這う葛も色が変わって、松の下紅葉などは、風の音にだけ秋を聞き知っているのではないといふのである。仰々しい高麗、唐土の樂よりも、東遊の耳馴れているのは、親しみやすく美しく、波風の音に響き合つて、あの木高い松風に吹き立てる笛の音も、他で聞く調べに変わつて身にしみて感じられ、お琴に合わせた拍子も、鼓を用いないで調子をつまく合わせた趣が、大げさなところがないのも、優美でぞつとするほど面白く、場所が場所だけに、いつそう素晴らしく聞こえるのであつた。

山藍で摺り出した竹の模様の衣装は、松の緑に見間違えて、挿頭の色とりどりののは、秋の草と見境がつかず、どれもこれも目先がちらつくばかりである。

「求子」が終わつた後に、若い上達部は、肩脱ぎしてお下りになる。光沢のない黒の袍衣から、蘇芳襲で、葡萄染の袖を急に引き出したところ、紅の濃い袖の袂が、はらはらと降りかかる時雨にちよつとばかり濡れたのは、松原であることを忘れて、紅葉が散つたのかと思われる。

皆見栄えのする容姿で、たいそう白く枯れた荻を、高々と挿頭に挿して、ただ一さし舞つて入ってしまったのは、実に面白くもつといつまでも見ていたい気がするのであつた。

「第六段 源氏、往時を回想」

大殿、昔の事が思い出されて、ひところ辛勞なさつた当時の有様も、目の前のように思い出されなさるが、その当時の事、遠慮なく語り合える相手もないので、致仕の大臣を、恋しくお思い申し上げなさるのであつた。お入りになつて、一の車に目立たないように。

「わたしの外に誰がまた昔の事情を知つて住吉の神代からの松に話しかけたりしましょつか」

御畳紙にお書きになつていた。尼君、感涙にむせぶ。このような時世を見るにつけても、あの明石の浦で、これが最後とお別れになつた時の事、女御

の君が御方のお腹の中にいらつしやつた時の様子などを思い出すにつけても、まことにもつたいたない運勢の程を思う。出家なさつた方も恋しく、あれこれと物悲しく思われるので、一方では涙は縁起でもないと思ひ直して言葉を慎んで、

「住吉の浜を生きていた甲斐がある渚だと、年とつた尼も今日知ることでしょう」

遅くなつては不都合だろうと、ただ思い浮かんだままにお返ししたのであつた。

「昔の事が何よりも忘れられない、住吉の神の靈験を目の当たりにするにつけても」

とひとり口ずさむのであつた。

「第七段 終夜、神樂を奏す」

一晚中神樂を奏して夜をお明かしなさる。二十日の月が遙かかなたに澄み照らして、海面が美しく見えわたつているところに、霜がたいそう白く置いて、松原も同じ色に見えて、何もかもが寒気をおぼえる素晴らしさで、風情や情趣の深さも一人に感じられる。

対の上は、いつものお邸の内にいらしたまま、季節季節につけて、興味ある朝夕の遊びに、耳慣れ目馴れていらつしやつたが、御門から外の見物をめつたになさらず、ましてこのような都の外へお出になることは、まだ「経験がないので、物珍しく興味深く思わずにはいらつしやれない。」

「住吉の浜の松に夜深く置く霜は、神様が掛けた木綿鬘でしよつか」

篁朝臣が、「比良の山さえ」と言つた雪の朝をお思いやりになると、「ご奉納の志をお受けになつた証だろつかと、ますます頼もしかった。女御の君、神主が手に持つた榊の葉に、木綿を掛け添えた深い夜の霜ですこと」

中務の君、

「神に仕える人々の木綿鬘と見間違えるほどに置く霜は、仰せのとおり神の御靈験の証でございませう」

次々と数え切れないほど多かつたのだが、どうして覚えていられようか。このような時の歌は、いつもの上手でいらつしやるような殿方たちも、か

えって出来映えがぱつとしないで、松の千歳を祝う決まり文句以外に、目新しい歌はないので、煩わしくて省略した。

「第八段 明石一族の幸い」

夜がほのぼのと明けて行くと、霜はいよいよ深く、本方と末方とがその分担もはつきりしなくなるほど、酔い過ぎた神楽面が、自分の顔がどんなになつていくか知らないで、面白いことに夢中になつて、庭燎も消えかかつて、依然として、万歳、万歳」と、榊の葉を取り直し取り直して、お祝い申し上げる御末々の栄えを、想像するだけでもいよいよめでたい限りである。

万事が尽きせず面白いまま、千夜の長さをこの一夜の長さにしたいたいほどの今夜も、何という事もなく明けてしまったので、返る波と先を争つて帰るのも残念なことに、若い人々は思う。

松原に、遙か遠くまで立て続けた幾台ものお車が、風に靡く下簾の間々も、常盤の松の蔭に、花の錦を引き並べたように見えるが、袍の色々な色が位階の相違を見せて、趣きのある懸盤を取つて、次々と食事を一同に差し上げるのを、下人などは目を見張つて、立派だと思つてゐる。

尼君の御前にも、浅香の折敷に、青鈍の表を付けて、精進料理を差し上げるという事で、驚くほどの女性の「運勢だ」と、それぞれ陰口を言ったのであつた。

御参詣なさつた道中は、ものものしいことで、もてあますほどの奉納品が、いろいろと窮屈げにあつたが、帰りはさまざまな物見遊山の限りをお尽くしになる。それを語り続けるのも煩わしく、厄介な事柄なので。

このようなご様子をも、あの入道が、聞こえないまた見えない山奥に離れ去つてしまわれたことだけが、不満に思われた。それも難しいことだろつ、出てくるのは見苦しいことであらうよ。世の中の人は、これを例として、高望みはやはりそんな時勢のようである。万事につけて、誉め驚き、世間話の種として、明石の尼君」と、幸福な人の例に言つたのであつた。あの致仕の大殿の近江の君は、双六を打つ時の言葉にも、

「明石の尼君、明石の尼君」

と言つて賽を祈つたのである。

第三章 朱雀院の物語 朱雀院の五十賀の計画

「第一段 女三の宮と紫の上」

入道の帝は、仏道に御専心あそばして、内裏の御政道にはいつさいお口をお出しにならない。春秋の朝覲の行幸には、昔の事をお思い出しになることもあつた。姫宮の御事だけを、今でも御心配でいらして、こちらの六条院を、やはり表向きのお世話役としてお思い申し上げなかつて、内々の御配慮を下さるべく帝にもお願い申し上げていらつしやる。二品におなりになつて、御封なども増える。ますます華やかに威勢も増す。

対の上は、このように年月とともに何かにつけてまさつて行かれるご声望に比べて、

「自分自身はただ一人が大事にして下さるお蔭で、他の人には負けないが、あまりに年を取り過ぎたら、そのご愛情もしまいに衰えよう。そのような時にならない前に、自分から世を捨てたい」

と、ずっと思ひ続けていらつしやるが、生意気なようにお思いになるだろつと遠慮されて、はつきりとはお申し上げになることができない。今上帝までが、御配慮を特別にして上げていらつしやるので、疎略など、お耳にあそばすことがあつたらお気の毒なので、お通いになることがだんだんと同等になつてなつて行く。

無理もないこと、当然なこととは思ひながらも、やはりそうであつたのかとばかり、面白からずお思いになるが、やはり素知らぬふうと同じ様にして過ごしていらつしやる。春宮のすぐお下の女一の宮を、こちらに引き取つて大切にお世話申し上げていらつしやる。そのご養育に、所在ない殿のいらつしやる夜々を気をお紛らしていらつしやるのだった。どちらの宮も区別せず、かわいくいとお思い申し上げていらつしやる。

「第二段 花散里と玉鬘」

夏の御方は、このようなあれこれのお孫たちのお世話を羨んで、大将の君の典侍腹のお子を、ぜひにと引き取ってお世話なさる。とてもかわいらしげで、氣立ても、年のわりには利発でしつかりしているの、大殿の君もおかわいがりになる。数少ないお子だと思いであつたが、孫は大勢できて、あちらこちらに数多くおなりになったので、今はただ、これらをかわいがり世話なさることで、退屈さを紛らしていらつしやるのであつた。

右の大殿が参上してお仕えなさることは、昔以上に親密になつて、今では北の方もすつかり落ち着いたお年となつて、あの昔の色めかしい事は思い諦めたのであろうか、適当な機会にはよくお越しになる。対の上ともお会いになつて、申し分ない交際をなさつていたのであつた。

姫宮だけが、同じように若々しくおつとりしていらつしやる。女御の君は、今は主上にすべてお任せ申し上げなさつて、この姫宮をたいそう心に懸けて、幼い娘のように思つてお世話申し上げていらつしやる。

### 「第三段 朱雀院の五十賀の計画」

朱雀院が、

「今はすつかり死期が近づいた心地がして、何やら心細いが、決してこの世のことは気に懸けまいと思ひ捨てたが、もう一度だけお会いしたく思うが、もし未練でも残つたら大変だから、大げさにはなくお越しになるように」と、お便り申し上げなさつたので、大殿も、

「なるほど、仰せの通りだ。このような御内意が仮になくてさえ、こちらから進んで参上なさるべきことだ。なおさらのこと、このようにお待ちになつていらつしやるとは、おいたわしいことだ」と、ご訪問なさるべきことをご準備なさる。

「何のきつかけもなく、取り立てた趣向もなくは、どうして簡単にお出かけになれようか。どのようなことをして、御覧に入れたらよからうか」と、ご思案なさる。

「来年ちよつとにお達しになる年に、若菜などを調進してお祝い申し上げますか」と、お考えになつて、いろいろな御法服のこと、精進料理のご準備、

何やかやと勝手が違うことなので、ご夫人方のお智慧も取り入れてお考えになる。

御出家以前にも、音楽の方面には御関心がおありでいらつしやつたので、舞人、楽人などを、特別に選考し、勝れた人たちだけをお揃えあそばす。右の大殿のお子たち二人、大将のお子は、典侍腹の子を加えて三人、まだ小さい七歳以上の子は、皆童殿上させなさる。兵部卿宮の童孫王、すべてしかるべき宮家のお子たちや、良家のお子たち、皆お選び出しになる。

殿上の君たちも、器量が良く、同じ舞姿と言つても、また格別な人を選んで、多くの舞の準備をおさせになる。大層なこの度の催しとあつて、誰も皆懸命に練習に励んでいらつしやる。その道々の師匠、名人が、大忙しのこのころである。

### 「第四段 女三の宮に琴を伝授」

姫宮は、もともと琴の御琴をお習いであつたが、とても小さい時に父院にお別れ申されたので、気がかりにお思ひになつて、

「お越しになる機会に、あの御琴の音をぜひ聞きたいものだ。いくら何でも琴だけは物になさつたことだろう」と、

と、陰で申されなさつたのを、帝におかせられてもお耳にあそばして、仰せの通り、何と言つても、格別のご上達でしょう。院の御前で、奥義をお弾きなさる機会に、参上して聞きたいものだ」

などと仰せになつたのを、大殿の君は伝え聞きなさつて、

「今までに適当な機会があるたびに、お教え申したことはあるが、その腕前は、確かに上達なさつたが、まだお聞かせできるような深みのある技術には達していないのを、何の準備もなく参上した機会に、お聞きあそばしたいと強くお望みあそばしたら、とてもきつときまり悪い思ひをすることになりはせぬか」

と、気の毒にお思ひになつて、ここのご熱心にお教え申し上げます。

珍しい曲目、二つ三つ、面白い大曲類で、四季につれて変化するはずの響き、空気の寒さ温かさをその音色によって調べ出して、高度な技術のい



る曲目ばかりを、特別にお教え申し上げになるが、気がかりなようではいらつしやるが、だんだんと習得なさるにつれて、大変上手におなりになる。

「昼間は、たいそう人の出入りが多く、やはり絃を一度揺すつて音をうねらせる間も、気ぜわしいので、夜な夜なに、静かに奏法の勘所をじっくりとお教え申し上げよう」

と言つて、対の上にも、そのころはお暇申されて、朝から晩までお教え申し上げなさる。

「第五段 明石女御、懐妊して里下り」

女御の君にも、対の上にも、琴の琴はお習わせ申されなかつたので、この機会に、めつたに耳にすることのない曲目をお弾きになつていらつしやるらしいのを、聞きたいとお思ひになつて、女御も、特別にめつたにないお暇を、ただ少しばかりお願い申し上げなつて御退出なつていた。

お子様がお二方いらつしやるが、再び懐妊なつて、五月月ほどにおなりだつたので、神事にかこつけてお里下がりしていらつしやるのであつた。十一日が過ぎたら、参内なさるようにとのお手紙がしきりにあるが、このような機会に、このように面白い毎夜の音楽の遊びが羨ましくて、どうしてわたしにはご伝授して下さらなかつたのだろう」と、恨めしくお思ひ申し上げなさる。

冬の夜の月は、人とは違つてご賞美なさるご性分なので、美しい雪の夜の光に、季節に合つた曲目類をお弾きになりながら、伺候する女房たちも少しはこの方面に心得のある者に、お琴類をそれぞれ弾かせて、管弦の遊びをなさる。

年の暮れ方は、対の上などは忙しく、あちらこちらの「ご準備で、自然とお指図なさる事柄があるのだ」

「春のつららかな夕方なごに、ぜひにこのお琴の音色を聞きたい」とおつしやり続けているうちに、年が改まつた。

「第六段 朱雀院の御賀を二月十日過ぎと決定」

朱雀院の五十の御賀は、まず今上の帝のあそばすことがたいそう盛大であるうから、それに重なつては不都合だと思ひになつて、少し日を遅らせなさる。二月十日過ぎとお決めになつて、楽人や、舞人などが参上しては、合奏が続く。

「こちらの対の上が、いつも聞きたがつているお琴の音色を、ぜひとも他の方々の箏の琴や、琵琶の音色も合わせて、女樂を試みてみたい。ただ最近の音楽の名人たちは、この院の御方々のお嗜みのほどにはかきませんね。きちんと伝授を受けたことは、ほとんどありませんが、どのようなことでも、何とかして知らないことがないようにと、子供の時に思つたので、世間にいる道々の師匠は全部、また高貴な家々の、しかるべき人の伝えをも残さず受けてみた中で、とても造詣が深くてこちらが恥じ入るように思われた人はいませんでした。

その当時から、また最近の若い人々が、風流で気取り過ぎているので、全く浅薄になつたのでしよう。琴の琴は、琴の琴で、他の樂器以上に全然稽古する人がなくなつてしまつたとか。あなたの御琴の音色ほどにさえも習ひ伝えている人は、ほとんどありませんまい」

とおつしやると、無邪気にはほ笑んで、嬉しくなつて、「このようにお認めになるほどになつたのか」とお思ひになる。

二十一、二歳ほどにおなりになりだが、まだとても幼げで、未熟な感じがついて、ほつそりと弱々しく、ただかわいらしくばかりお見えになる。

「院にもお目にかかりなさらないで、何年にもなつたが、ご成人なつたと御覽いただけるように、一段と氣をつけてお会い申し上げなさい」

と、何かの機会につけてお教え申し上げなさる。

「なるほど、このようになつて後見役がいなくては、まして幼そうにいらつしやいますご様子、隠れようもなかつた」

と、女房たちも拝見する。

#### 第四章 光源氏の物語 六条院の女樂

「第一段 六条院の女樂」

正月二十日ほどなので、空模様もうららかに、風がなま温かく吹いて、御前の梅の花も盛りになって行く。たいていの花の木も、みな蕾がふくらんで、一面に霞んでいた。

「来月になつたら、ご準備が近づいて、何かと騒がしかろうから、合奏なされる琴の音色も、試楽のように人が噂するだろうから、今の静かなころに合奏なさつてごらんさい」

とおっしゃつて、寢殿にお迎え申し上げなされる。

お供に、わたしもわたしもと、合奏を聞きたく参上したが、音楽の方面に疎い者は、残させなされて、すこし年は取つていても、心得のある者だけを選んで伺候させなされる。

女童は、器量の良い四人、赤色の表着に桜襲の汗衫、薄紫色の織紋様の袖、浮紋の上の袴に、紅の打つてある衣装で、容姿、態度などのすぐれている者たちだけをお召しになっていた。女御の御方にも、お部屋飾り付けなど、常より一層に改めたころの明るさなので、それぞれ競争し合つて華美を尽くしている衣装、鮮やかなこと、またとない。

童は、青色の表着に蘇芳の汗衫、唐綾の表袴、袖は山吹色の唐の綺を、お揃いで着ていた。明石の御方は、仰々しくならず、紅梅襲が二人、桜襲が二人、いずれも青磁色ばかりで、袖は濃紫や薄紫、打目の模様が何とも言えず素晴らしいのを着せていらつしやう。

宮の御方でも、このようにお集まりになるとお聞きになって、女童の容姿だけは特別に整えさせていらつしやう。青丹の表着に柳襲の汗衫、葡萄染の袖など、格別趣向を凝らして目新しい様子ではないが、全体の雰囲気、立派で気品があることまで、まことに並ぶものがない。

「第二段 孫君たちと夕霧を召す」

廂の中の御障子を取り外して、あちらとこちらと御几帳だけを境にして、中の間には、院がお座りになるための御座所を設けてあつた。今日の拍子合わせの役には、子供を召そうとして、右の大殿の三郎君、尚侍の君の御腹の兄君、笙の笛、左大将の御太郎君、横笛と吹かせて、簀子に伺候させ

なされる。

内側には御褥をいくつも並べて、お琴を御方々に差し上げる。秘蔵の御琴類を、いくつもの立派な紺地の袋に入れてあるのを取り出して、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏のお琴、宮には、このような仰々しい琴はまだお弾きになれないかと、心配なので、いつもの手馴れていらつしやる琴を調絃して差し上げなされる。

「箏のお琴は、弛むというわけではないが、やはり、このように合奏する時の調子によつて、琴柱の位置がずれるものだ。よくその点を考慮すべきだが、女性の力ではしつかりと張ることはできない。やはり、大将を呼んだ方がよさそうだ。この笛吹く人たちも、まだ幼いようので、拍子を合わせるには頼りにならない」

とお笑いになつて、

「大将、」

とお呼びになるので、御方々はきまり悪く思つて、緊張していらつしやる。明石の君を除いては、どなたも皆捨てがたいお弟子たちなので、お気を遣われて、大将がお聞きになるので、難点がないようにとお思いになる。

「女御は、ふだん主上がお聞きあそばすにも、楽器に合わせながら弾き馴れていらつしやるので、安心だが、和琴は、たいして変化のない音色なので、奏法に決まつた型がなくて、かえつて女性は弾き方にまごつくに違いないのだ。春の琴の音色は、おおよそ合奏して聞くものであるから、他の楽器と合わないところが出て来ようかしら」

と、何となく気がかりにお思いになる。

「第三段 夕霧、箏を調絃す」

大将は、とてもたいそう緊張して、御前での大がかりな、改まつた御試楽以上に、今日の気づかいは、格別に勝つて思われなかつたので、鮮やかなお直衣に、香のしみたくいく重ものお召し物で、袖に特に香をたきしめて化粧して参上なされるころ、日はすっかり暮れてしまつた。

趣深い夕暮の空に、花は去年の古雪を思い出されて、枝も撓むほどに咲き乱れている。緩やかに吹く風に、何とも言えず素晴らしく匂つている御

簾の内側の薫りも一緒に漂って、鶯を誘い出すしるべにできそうな、たいそう素晴らしい御殿近辺の匂いである。御簾の下から箏のお琴の裾、少しさし出して、

「失礼なようですが、この絃を調節して、みてやって下さい。ここには他の親しくない人を入れることはできないものですから」

とおっしゃると、礼儀正しくお受け取りになる態度、心づかいも行き届いていて立派で、吉越調の音に発の緒を合わせて、すぐには弾き始めずに控えていらっしやるので、

「やはり、調子合わせの曲ぐらひは、一曲、興をそがない程度に」とおっしゃるので、

「まったく、今日の演奏会のお相手に、仲間入りできるような腕前では、ございせんから」

と、思わせぶりな態度をなさる。

「もつともない方だが、女樂の相手もできずに逃げ出したと、噂される方が不名誉だぞ」

と言つてお笑いになる。

調絃を終わつて、興をそそのる程度に調子合わせだけを弾いて、差し上げなされた。このお孫の君たちが、とてもかわいらしい宿直姿で、笛を吹き合わせている音色は、まだ幼い感じだが、将来性があつて、素晴らしく聞こえる。

#### 「第四段 女四人による合奏」

それぞれのお琴の調絃が終わつて、合奏なさる時、どれも皆優劣つけがたい中で、琵琶は特別上手という感じで、神々しい感じの弾き方、音色が澄みきつて美しく聞こえる。

和琴に、大将も耳を留めていらっしやるが、やさしく魅力的な爪弾きに、掻き返した音色が、珍しく当世風で、まったくこの頃名の通つた名人たちが、ものものしく掻き立てた曲や調子に負けず、華やかで、大和琴にもこのような弾き方があつたのか」と感嘆される。深いお嗜みのほどがはつきりと分かつて、素晴らしいので、大殿はご安心なさつて、またとない方だ

とお思い申し上げなさる。

箏のお琴は、他の楽器の音色の合間合間に、頼りなげに時々聞こえて来るといつた性質の音色のもので、可憐で優美一筋に聞こえる。

「琴の琴は、やはり未熟ではあるが、習つていらっしやる最中なので、あぶなげなく、たいそう良く他の楽器の音色に響き合つて、随分と上手になつたお琴の音色だな」と、大将はお聞きになる。拍子をとつて唱歌なさる。院も、時々扇を打ち鳴らして、一緒に唱歌なさるお声、昔よりもはるかに美しく、少し声が太く堂々とした感じが加わつて聞こえる。大将も、声はたいそう勝れていらっしやる方で、夜が静かになつて行くにつれて、何とも言いようのない優雅な夜の音楽会である。

#### 「第五段 女四人を花に喩える」

月の出が遅いころなので、灯籠をあちらこちらに懸けて、明かりを調度良い具合に灯させていらっしやつた。

宮の御方をお覗きになると、他の誰よりも一段と小さくかわいらしげで、ただお召し物だけがあるという感じがする。つややかな美しさは劣るが、ただとても上品に美しく、二月の二十日頃の青柳が、ようやく枝垂れ始めたような感じがして、鶯の羽風にも乱れてしまいそうなくらい、弱々しい感じにお見えになる。

桜襲の細長に、御髪は左右からこぼれかかつて、柳の糸のようであつた。

「この方こそは、この上ないご身分の方のご様子というものだろう」と見えるが、女御の君は、同じような優美なお姿で、もう少し生彩があつて、態度や雰囲気も奥ゆかしく、風情のあるご様子でいらっしやつて、美しく咲きこぼれている藤の花が、夏に咲きかかつて、他に並ぶ花がない、朝日に輝いているような感じでいらっしやつた。

とは言え、とてもふつくらとしたころにおなりになつて、ご気分もすぐれない時期でいらっしやつたので、お琴も押しやつて、脇息に寄りかかつていらっしやつた。小柄なお身体でなよなよとしていらっしやるが、ご脇息は並の大きさなので、無理に背伸びしている感じで、特別に小さく作つて上げたいと見えるのが、とてもおかわいらしげにお見えになるのであつた。

紅梅襲のお召物に、お髪がかかつてさらさらと美しく、灯台の光に映し出されたお姿、またとなくかわいらしげだが、紫の上は、葡萄染であろうか、色の濃い小袿に、薄蘇芳襲の細長で、お髪がたまっていてる様子、たつぷりとゆるやかで、背丈などちょうど良いぐらいで、姿形は申し分なく、辺り一面に美しさが満ちあふれている感じがして、花と言ったら桜に喩えても、やはり衆に抜ん出た様子、格別の風情でいらっしやる。

このような方々の中で、明石は圧倒されてしまうところだが、まったくそのようなことはなく、態度なども意味ありげにこちらが恥ずかしくなるくらいで、心の底を覗いてみたいほどの深い様子で、どこことなく上品で優雅に見える。

柳の織物の細長に、萌黄であろうか、小袿を着て、羅の裳の目立たないのを付けて、特に卑下していたが、その様子、そうと思うせいもあって、立派で軽んじられない。

高麗の青地の錦で縁どりした敷物に、まともに座らず、琵琶をちよつと置いて、ほんの心持ばかり弾きかけて、しなやかに使いこなした撥の扱いよう、音色を聞くやいなや、また比類なく親しみやすい感じがして、五月待つ花橘の、花も実もともに折り取った薫りのように思われる。

#### 「第六段 夕霧の感想」

この方もあの方も、とりすましたご様子を見たり聞いたりなされると、大将も、まことに中を御覧になりたくお思いになる。対の上が、昔見た時よりも、ずっと美しくなつていらっしやるだろう様子が見たいので、心が落ち着かない。

「宮を、もう少し運勢があつたなら、自分の妻としてお世話申し上げられたであろうに。まことにゆつたり構えていたのが悔やまれるよ。院は、度々そのように水を向けられ、蔭でおっしゃつていられたものを」と、残念に思うが、少し軽率なようにお見えになるご様子に、軽くお思い申すと言うのではないが、それほど心は動かなかったのである。

こちらの御方を、何事につけても手の届くすべなく、高嶺の花として、長年過ごして来たので、ただ何とかして、義理の親子の関係として、好意を

お寄せ申している気持ちをお見せ申し上げたい」とだけ、残念に嘆かわしいのであった。むやみに、あつてはならない大それた考えなどは、まったくおありではなく、実に立派に振る舞つていらっしやった。

#### 第五章 光る源氏の物語 源氏の音楽論

##### 「第一段 音楽の春秋論」

夜が更けて行く様子、冷え冷えとした感じがする。臥待の月がわずかに顔を出したのを、

「おほつかない光だね、春の朧月夜は。秋の情趣は、やはりまた、このような楽器の音色に、虫の声を合わせたのが、何とも言えず、この上ない響きが深まるような気がするものだ」とおつしやると、大将の君、

「秋の夜の曇りない月には、すべてのものがくつきりと見え、琴や笛の音色も、すつきりと澄んだ気は致しますが、やはり特別に作り出したような空模様や、草花の露も、いろいろと目移りし気が散つて、限界がございます。春の空のたどたどしい霞の間から、朧に霞んだ月の光に、静かに笛を吹き合わせたようなものには、どうして秋が及びましょうか。笛の音色なども優艶に澄みきることはないのです。」

女性は春をあわれぶと、昔の人が言つておりました。なるほど、そのようでございます。やさしく音色が調和する点では、春の夕暮が格別でございます。」

と申し上げなされると、

「いや、この議論だがね。昔から皆が判断しかねた事を、末の世の劣つた者には、決定しがたいことである。楽器の調べや、曲目などは、なるほど律を二の次にしているが、そのようなことである。」

などとおつしやつて、

「どんなものであろう。現在、演奏上手の評判の高い、その人あの人を、帝の御前などで、度々試みさせあそばすと、勝れた者は、数少なくなつたよ

うだが、その一流と思われる名人たちも、どれほど習得し得ていないのではなからうか。このような何でもないご婦人方の中で一緒に弾いたとしても、格別に勝れているように思われない。

何年もこのように引き籠もって過ごしていると、鑑賞力も少し変になったのだから、残念なことだ。妙に、人々の才能は、ちよつと習い覚えた芸事でも、見栄えがして他より勝れているところである。あの、御前の管弦の御遊などに、一流の名手として選ばれた人々の、誰それと比較したらどうであらうか」

とおっしゃるので、大將は、

「その事を、申し上げようと思っておりますが、よくも弁えぬくせに、偉そうに言うのもどうかと存じまして。古い昔の勝れた時代を聞き比べておりませんからでしょうか、衛門督の和琴、兵部卿宮の御琵琶などは、最近の珍しく勝れた例に引くようでございます。

なるほど、又とない演奏者ですが、今夜お聞き致しました楽の音色は、皆同じように耳を驚かしました。やはり、このように特別のこともない御催しと、かねがね思つて油断しておりました気持ちが無意をつかれて騒ぐのでしょうか。唱歌など、とてもお付き合ひにくうございました。

和琴は、あの太政大臣だけが、このように臨機応変に、巧みに操つた音色などを、思いのままに掻き立てていらつしやるのは、とても格別上手でいらつしやつたが、なかなか飛び抜けて上手には弾けないものでございませぬに、まことに勝れて調子が整つてございました」

と、お誉め申し上げなさる。

「いや、それほど大した弾き方ではないが、特別に立派なようにお誉めになるね」

とおっしゃつて、得意顔に微笑んでいらつしやる。

「なるほど、悪くはない弟子たちである。琵琶は、わたしが口出しするようなどことは何もないが、そうは言つても、どことなく違ふはずだ。思いがけない所で初めて聞いた時、珍しい楽の音色だと思われたが、その時から、又格段上達しているからな」

と、強引に自分の手柄のように自慢なさるので、女房たちは、そつとつきあつ。

「何事も、その道その道の稽古をすれば、才能というもので、どれも際限ないとだんだんと思われてくるもので、自分の気持ちに満足する限度はなく、習得することは実に難しいことだが、いや、どうして、その奥義を究めた人が、今の世に少しもないので、一部分だけでも無難に習得したような人は、その一面で満足してもよいのだが、琴の琴は、やはり面倒で、手の触れにくいものである。

この琴は、ほんとうに奏法どおりに習得した昔の人は、天地を揺るがし、鬼神の心を柔らげ、すべての楽器の音がこれに従つて、悲しみの深い者も喜びに変わり、賤しく貧しい者も高貴な身となり、財宝を得て、世に認められるといつた人が多かつたのであつた。

わが国に弾き伝える初めまで、深くこの事を理解している人は、長年見知らぬ国で過ごし、生命を投げうつて、この琴を習得しようとさまよつてすら、習得し得るのは難しいことであつた。なるほど確かに、明らかに空の月や星を動かしたり、時節でない霜や雪を降らせたり、雲や雷を騒がしたりした例は、遠い昔の世にはあつたことだ。

このように限らない楽器で、その伝法どおりに習得する人がめつたになく、末世だからであらうか、どこにその当時の一部分が伝わっているのだろうか。けれども、やはり、あの鬼神が耳を止め、傾聴した始まりの事のある琴だからであらうか、なまじ稽古して、思いどおりにならなかつたという例があつてからは、これを弾く人、禍があるとか言つ難癖をつけて、面倒なままに、今ではめつたに弾き伝える人がいないとか。実に残念なことである。

琴の音以外では、どの絃楽器をもつて音律を調える基準とできようか。なるほど、すべての事が衰えて行く様子は、たやすくなくて行く世の中で、一人故国を離れて、志を立てて、唐土、高麗と、この世をさまよい歩き、親子と別れることは、世の中の変わり者となつてしまつたことだろう。

どうして、それほどまでせずとも、やはりこの道をだいたい知る程度の一端だけでも、知らないでいられようか。一つの調べを弾きこなす事さえ、

量り知れない難しいものであるという。いわんや、多くの調べ、面倒な曲目が多いので、熱中していた盛りには、この世にあらん限りの、わが国に伝わっている楽譜という楽譜のすべてを広く見比べて、しまいには、師匠とすべき人もなくなるまで、好んで習得したが、やはり昔の名人には、かないそうにない。まして、これから後という、伝授すべき子孫がいなのが、何とも心寂しいことだ」

などとおっしゃるので、大將は、なるほどまことに残念にも恥ずかしいとお思いになる。

「この御子たちの中で、望みどおりにご成人なさる方がおいでなら、その方が大きくなつた時に、その時まで生きていることがあつたら、いかほどでもないわたしの技にしても、すべてご伝授申し上げよう。三の宮は、今からその才能がありそうにお見えになるから」

などとおっしゃると、明石の君は、たいそう面目に思つて、涙ぐんで聞いていらつしやつた。

### 「第三段 源氏、葛城を謡う」

女御の君は、箏の御琴を、紫の上にお譲り申し上げて、寄りかかりなされたので、和琴を大殿の御前に差し上げて、寛いだ音楽の遊びになつた。「葛城」を演奏なさる。明るくおもしろい。大殿が繰り返しお謡いになるお声は、何にも喻えようがなく情がこもつていて素晴らしい。

月がだんだんと高く上つて行くにつれて、花の色も香も一段と引き立てられて、いかにも優雅な趣である。箏の琴は、女御のお爪音は、とてもかわいらしげにやさしく、母君のご奏法の感じが加わつて、揺の音が深く、たいそう澄んで聞こえたのを、こちらの奏法は、また様子が違つて、緩やかに美しく、聞く人が感に堪えず、気もそぞろになるくらい魅力的で、輪の手など、すべていかに、たいそう才気あふれたお琴の音色である。

返り声に、すべて調子が変わつて、律の合奏の数々が、親しみやすく華やかな中にも、琴の琴は、五箇の調べを、たくさんある弾き方の中で、注意して必ずお弾きにならなければならない五、六の発刺を、たいそう見事に澄んでお弾きになる。まったくおかしなところはなく、たいそうよく澄

んで聞こえる。

春秋どの季節の物にも調和する調べなので、それぞれに相応しくお弾きになる。そのお心配りは、お教え申し上げたものと違わず、たいそうよく会得していらつしやるのを、たいそういじらしく、晴れがましくお思い申し上げになる。

### 「第四段 女樂終了、禄を賜つ」

この若君たちが、とてもかわいらしく笛を吹き立てて、一生懸命になっているのを、おかわいがりになつて、

「眠たくなつていようだろつに。今夜の音楽の遊びは、長くはしないで、ほんの少しのところだと思つていたが。やめるのは惜しい楽の音色が、甲乙をつけがたいのを、聞き分けるほどに耳がよくないので愚図愚図しているうちに、たいそう夜が更けてしまつた。気のつかないことであつた」

と云つて、笙の笛を吹く君に、杯をお差しになつて、お召物を脱いでお与えになる。横笛の君には、こちらから、織物の細長に、袴などの仰々しくないふうに、形ばかりにして、大將の君には、宮の御方から、杯を差し出して、宮のご装束を一領をお与え申し上げなさるのを、大殿は、

「妙なことだね。師匠のわたしにこそ、さつそくご褒美を下さつてよいものなのに。情ないことだ」

とおっしゃるので、宮のおいであそばす御几帳の側から、御笛を差し上げる。微笑みなさつてお取りになる。たいそう見事な高麗笛である。少し吹き鳴らしなされると、皆お返りになるところであつたが、大將が立ち止まりなさつて、ご子息の持つておいでの笛を取つて、たいそう素晴らしく吹き鳴らしなさつたのが、実に見事に聞こえたので、どなたもどなたも、皆ご奏法を受け継がれたお手並みが、実に又となくばかりあるので、ご自分の音楽の才能が、めつたにないほどだと思われなさるのであつた。

### 「第五段 夕霧、わが妻を比較して思つ」

大將殿は、若君たちをお車に乗せて、月の澄んだ中を「ご退出なさる。道中、箏の琴が普通とは違つてたいそう素晴らしかつた音色が、耳について恋しくお思い出されなさる。」

「ご自分の北の方は、亡き大宮がお教え申し上げなさつたが、熱心にお習いなさらなかつたうちに、お引き離されておしまいになつたので、ゆつくりとも習得なさらず、夫君の前では、恥ずかしがつて全然お弾きにならない。何ごともただあつさりとおつとりとした物腰で、子供の世話に、休む暇もなく次々となさるので、風情もなくお思いになる。そうはいつても、機嫌を悪くして、嫉妬するところは、愛嬌があつてかわいらしい人柄でいらつしやるようである。」

## 第六章 紫の上の物語 出家願望と発病

「第一段 源氏、紫の上と語る」

院は、対へお渡りになつた。紫の上は、お残りになつて、宮にお話など申し上げなさつて、暁方にお歸りになつた。日が高くなるまでお寝みになつた。

「宮のお琴の音色は、たいそう上手になつたものだ。どのようにお聞きなさいましたか」

とお尋ねなさるので、

「初めの方は、あちらでちらつと聞いた時には、どんなものかしらと思いましたが、とてもこの上なく上手になりましたわ。どうして、あのように専心してお教え申し上げになつたのですから」

とお答えなさる。

「そつなのだ。手を取り取りの、たいした師匠なんだよ。他のどなたにも、厄介で、面倒なことなので、お教え申さないが、院にも帝にも、琴の琴はいくらなんでもお教え申しているだろつとおつしやると、耳にするのがおいたわしくて、そつは言つても、せめてその程度のことだけはと、このように特別なご後見にとお預けになつた甲斐にはと、思い立つてね」

などと申し上げなさるついでにも、

「昔、まだ幼かつたころ、お世話したものだ、当時は暇がなくて、ゆつくりと特別にお教え申し上げることなどもなく、近頃になつても、何となく次から次へと、とり紛れては日を送り、聞いて上げなかつたお琴の音色が、素晴らしい出来映えだつたのも、晴れがましいことで、大將が、たいそう耳を傾け感嘆していた様子も、思いどおりで嬉しいことであつた」

などと申し上げなさる。

「第二段 紫の上、三十七歳の厄年」

こついつた音楽の方面のことも、今はまた年輩者らしく、若君たちのお世話などを、引き受けなさつている様子も、至らないところなく、すべて何事につけても、非難されるような行き届かないところなく、世にもまれなご様子の方なので、まことにこのように何から何までそなわつていらつしやる方は、長生きしない例もあるといつのでと、不吉なまでにお思い申し上げなさる。

いろいろな人の有様を多く御覧になつていたために、何から何まで揃つてゐる点では、本当に例があるまいと心底からお思い申し上げていらつしやつた。今年、三十七歳におなりである。一緒に暮らして申されてからの年月のことなどを、しみじみとお思い出しなさつたついでに、

「しかるべきご祈禱など、いつもの年よりも特別にして、今年にご用心なさい。何かと忙しくばかりあつて、考えつかないことがあるだろつから、やはり、あれこれとお思いめぐらになつて、大がかりな仏事を催しなされるなら、わたしの方でさせていたごう。僧都が亡くなつてしまわれたことが、たいそう残念なことだ。一通りのお願ひをするのにつけても、たいそう立派な方であつたのに」

などとおつしやる。

「第三段 源氏、半生を語る」

「わたしは、幼い時から、人とは違つたふうで、大層な育ち方をして来て、現在の世の評判や有様、過去にも類例が少ないものであつた。けれども、また一方で、大変に悲しいめに遭つたことでも、人並み以上であつたことでも、まず第一に、愛する方々に次々と先立たれ、とり残された晩年になつても、意に満たず悲しいと思う事が多く、不本意にも感心しないことにかかわつたにつけても、妙に物思いが絶えず、心に満足のゆかず思われる事が身につきまゝとつて過ごして来てしまつたので、その代わりとでもいふのか、思つていたわりに、今まで生き永らえているのだらうと、思はずにはいられません。

あなたご自身には、あの一件での離別のほかは、その前にも後にも、心配して、心をお痛めになるようなことはあるまいと思つ。后と言つても、ましてそれより下の方々は、身分が高いからと言つても、皆必ず物思いの種が付き纏うものなのです。

高いお付き合ひをするにつけても、気苦労があり、人と争ふ思いが絶えないのも、樂なことではないから、親のもとでの深窓生活同然に暮らしていらつしやるような氣樂さはありません。その点では、人並み以上の運勢だとお分かりでしょうか。

思いもかけず、この宮がこのようにお興入れなさつたのは、何やら辛くお思いでしょうが、それにつけては、いつそう勝る愛情を、ご自分の身の上のことですから、あるいはお氣づきでないかも知れません。物のわけをよくお分りのようですから、きっとお分りだらうと思ひます」

と申し上げなされると、

「おつしやるように、ふつつかな身の上には、過ぎた事と世間の目には見えましようが、心に堪えない物思ひばかりがつきまゝとつのは、それがわたし自身のご祈祷となつて残っているのでした」

と言つて、多く言い残したような様子は、奥ゆかしそうである。

「ほんとうのことを申しますと、もうとても先も長くはないような心地がするのですが、今年もこのように知らない顔をして過ごすのは、とても不安なことです。先々にも申し上げたこと、何とかお許しがあれば」

と申し上げなされる。

「それは、とんでもないことだ。そうして、離れておしまひになつた後に残つ

たわたしは、何の生き甲斐があるう。ただこのように何ということもなく過ぎて行く月日だが、朝に晩に顔を合わせる嬉しさだけで、これ以上の事はないと思われるのです。やはりあなたを人とは違つて思ふ氣持ちがどれほど深いものであるか最後まで見届けてください」

とばかり申し上げなされるのを、いつものことと胸が痛んで、涙ぐんでいらつしやる様子を、たいそつといつとしいと拝見なさつて、いろいろとお慰め申し上げなされる。

「第四段 源氏、関わつた女方を語る」

「多くは知らないが、人柄が、それぞれにとりえのないものはないと分かつて行くにつれて、ほんとうの氣立てがおおらかで落ち着いているのは、なかなかないものであると、思つようになりました。

大将の母君を、若いころにはじめて妻として、大事にしなければならぬ方とは思つたが、いつも夫婦仲が好くなく、うちとけぬ氣持ちのまま終つてしまつたのが、今思つと、氣の毒で残念である。

しかしまた、わたし一人の罪ばかりではなかつたのだと、自分の胸一つに思い出される。きちんとして重々しくて、どの点が不満だと思われれることもなかつた。ただ、あまりにくつろいだところがなく、几帳面すぎて、少してすぎた人であつたと言つべきであらうかと、離れて思ふには信賴が置いて、一緒に生活するには面倒な人柄であつた。

中宮の御母君の御息所は、人並すぐれてたしなみ深く優雅な人の例としては、まず第一に思ひ出されるが、逢うのに氣がおけて、こちらが氣苦労するような方でした。恨むことも、なるほど無理もないことと思われれる点を、そのままいつまでも思ひ詰めて、深く怨まれたのは、まことに辛いことであつた。

緊張のし通して氣づまりで、自分も相手もゆつくりとして、朝夕睦まじく語らうには、とても氣の引けるところがあつたので、氣を許しては輕蔑されるのではないかなどと、あまりに体裁をつくらつていたうちに、そのまま疎遠になつた仲なのです。

たいそうとんでもない浮名を立て、ご身分に相応しくなくなつてしまつ



た嘆きを、たいそう思い詰めていらつしやうたのがお気の毒で、なるほど人柄を考えても、自分に罪がある心地がして終わってしまったその罪滅ぼしに、中宮をこのようにそうなるべき前世からの「因縁」とは言いながら、取り立てて、世の非難、人の嫉妬も意に介さず、お世話申し上げているのを、あの世からであつても考え直して下さつたらう。今も昔も、いいかげんな気まぐれから、気の毒な事や後悔する事が多いのです」

と、亡くなつたご夫人方について少しずつおつしやり出して、

「今上の御方の「ご後見は、大した身分の人でない」と、最初から軽く見て、気楽な相手だと思つていたが、やはり心の底が見えず、際限もなく深いところのある人でした。表面は従順で、おつとりして見えるながら、しつかりしたところが下にあつて、どことなく気の置けるところがある人です」

とおつしやるが、

「他の方は会つたことがないので知りませんが、この方は、はつきりとはなないが、自然と様子を見る機会も何度かあつたので、とても馴れ馴れしくできず、気の置ける嗜みがはつきりと分かりますにつけても、とても途方もない単純なわたしを、どのように御覧になつていらっしゃるかと、気の引けるところですが、女御は、自然と大目に見て下さるだらうとばかり思つています」

とおつしやる。

あれほど目障りな人だと心を置いていらつしやうた人を、今ではこのように顔を合わせたなりなどなさるのも、女御の御ためを思う真心の結果なのだとお思いになると、普通にはとても出来ないことなので、

「あなたこそは、それでもやはり心底に思わないこともないではないが、人によつて、事によつて、とても上手に心を使い分けていらつしやいますね。全く多くの女たちに接して来たが、あなたのご様子に似ている人はいませんでした。とても態度は格別でいらつしやいます」

と、ほほ笑んで申し上げなさる。

「宮に、とても琴の琴を上手にお弾きになつたお祝いを申し上げます」

と言つて、夕方お渡りになつた。自分に気兼ねする人があろうかともお考えにもならず、とてもたいそう若々しくて、一途に御琴に熱中していらつしやる。

「もつ、お暇を下さつて休ませていただきたいものです。師匠は満足させてこそです。とても辛かつた日頃の成果があつて、安心出来るほどお上手になりになりました」

と言つて、お琴類は押しやつて、お寝みになつた。

「第五段 紫の上、発病す」

対の上のもとでは、いつものようにいらつしやらない夜は、遅くまで起きていらして、女房たちに物語などを讀ませてお聞きになる。

「このように、世間で例に引き集めた昔語りにも、不誠実な男、色好み、二心ある男に關係した女、このよつなことを語り集めた中にも、結局は頼る男に落ち着くよつだ。どつしたことが、浮いたまま過してきたことだわ。確かにおつしやつたよつに、人並み勝れた運勢であつたわが身の上だが、世間の人が我慢できず満足ゆかないこととする悩みが身にまといつて終わるうとするのだらうか。つまらない事よ」

などと思ひ續けて、夜が更けてお寝みになつた、その明け方から、お胸をお病みになる。女房たちのご看病申し上げます、

「お知らせ申し上げます」

とおつしやるが、

「とても都合なことです」

とお制しなさつて、苦しいのを我慢して夜を明かしなさつた。お身体も熱があつて、ご気分もとても悪いが、院がすぐにお歸りにならない間、これこれとも申し上げない。

「第六段 朱雀院の五十賀、延期される」

女御の御方からお便りがあつたので、

「これこれと気分が悪くていらつしやいます」

とおつし申し上げなさると、びっくりして、そちらから申し上げなさつたので、胸がどきりとして、急いでお歸りになると、とても苦しそつにしていらつ

「じゃる。」

「どのようない気分ですか」

と手をさし入れなされると、とても熱っぽくいらつしやるので、昨日申し上げなされたご用心のことなどをお考え合わせになって、とても恐ろしく思わずにはいらつしやれない。

御粥などをこちらで差し上げたが、御覧にもならず、一日中付き添っていらして、いろいろと介抱なさりお心を痛めなされる。ちょっとしたお果物でさえ、とても億劫になさつて、起き上がりなされることはまったくなくなつて、数日が過ぎてしまつた。

どうなるのだろうとご心配になつて、御祈祷などを、数限りなく始めさせなされる。僧侶を召して、御加持などをおさせになる。どこということもなく、たいそうお苦しみになつて、胸は時々発作が起つてお苦しみになされる様子は、我慢できないほど苦しげである。

さまざまのご謹慎は数限りないが、効験も現れない。重態と見えても、自然と快方に向かう兆しが見えれば期待できるが、たいそう心細く悲しいと見守つていらつしやると、他の事はお考えになれないので、御賀の騒ぎも静まつてしまつた。あちらの院からも、このようにご病氣である由をお聞きあそばして、お見舞いを非常に御丁寧に、度々申し上げなされる。

### 「第七段 紫の上、二条院に転地療養」

同じような状態で、二月も過ぎた。言いようもない程にお嘆きになつて、ために場所をお変えなさろうととして、二条院にお移し申し上げなされた。院の中は上を下への大騒ぎで、嘆き悲しむ者が多かつた。

冷泉院にもお聞きあそばして悲しまれる。この方がお亡くなりになつたら、院もきつと出家のご素志をお遂げになるだろうと、大将の君なども、真心をこめてお世話申し上げなされる。

御修法などは、普通に行つたものとはより、特別に選んでおさせになる。少しでも意識がはつきりしている時には、

「お願い申し上げていることを、お許しなく情けなくて」

とだけお恨み申し上げなされるが、寿命が尽きてお別れなされるよりも、目

の前でご自分の意志で出家なされるご様子を見ては、まったく少しの間でも耐えられず、惜しく悲しい気がしないではいられないので、

昔から、自分自身ごそのような出家の本願は深かつたのだが、残されて物寂しくお思いなされる氣の毒さに心引かれ引かれして過しているのに、逆にわたしを捨てて出家なさろうとお思いなのですか」

とばかり、惜しみ申し上げなされるが、本当にとでも頼りなさそうに弱々しく、もうこれきりかとお見えになる時々が多かつたが、どのようになつてお迷いになつては、宮のお部屋には、ちょっとの間もお出掛けにならない。御琴類にも興が乗らず、みなしまいこまれて、院の内の人々は、すっかりみな二条院にお集まりになつて、こちらの院では、火を消したようになつて、ただ女君たちばかりがおいでになつて、お一方の御威勢であつたかと思える。

### 「第八段 明石女御、看護のため里下り」

女御の君もお渡りになつて、ご一緒に看護申し上げます。

普通のお身体でもいらつしやらないので、物の怪などがとても恐ろしいから、早くお帰りあそばせ」

と、苦しいご気分ながらも申し上げなされる。若宮が、とてもかわいらしくていらつしやるのを拝見なさつても、ひどくお泣きになつて、

「大きくおなりになるのを、見るごことができずになりましようこと。きつとお忘れになつてしまつてしょうね」

とおつしやるので、女御は、涙を堪えきれず悲しくお思いでいらつしやつた。

縁起でもない、そのようにお考えなさいますな。いくら何でも悪いことにはおなりになるまい。気持ちの持ちようで、人はどのようになつてもなるものです。心の広い人には、幸いもそれに従つて多く、狭い心の人には、そうなる運命によつて、高貴な身分に生まれても、ゆつたりゆつたりのある点では劣り、性急な人は、長く持続することはできず、心穏やかでおつとりとした人は、寿命の長い例が多かつたものです」

などと、仏神にも、この方のご性質が又とないほど立派で、罪障の軽い

事を詳しくご説明申し上げなされる。

御修法の阿闍梨たち、夜居などでも、お側近く伺候する高僧たちは皆、たいそうこんなにまで途方に暮れていらつしやるご様子を聞くと、何ともおいたわしいので、心を奮い起こしてお祈り申し上げる。少しよろしいようにお見えになる日が五、六日続いては、再び重くお悩みになること、いつまでということなく続いて、月日をお過ごしになるので、やはり、どのようにおなりになるのだろうか。治らないご病気なのかしら」と、お悲しみになる。

御物の怪などと言って出て来るものもない。お悩みになるご様子は、どこということも見えず、ただ日がたつにつれて、お弱りになるようにばかりお見えになるので、とてもとても悲しく辛い事とお思いになると、お心の休まる暇もなさそうである。

## 第七章 柏木の物語 女二の宮密通の物語

### 「第一段 柏木、女二の宮と結婚」

そうであつたよ、衛門督は、中納言になつたのだ。今上の御治世では、たいそう御信任厚くて、今を時めく人である。わが身の声望が高まるにつけても、思いが叶わない悲しさを嘆いて、この宮の御姉君の二の宮を御降嫁頂いたのであつた。身分の低い更衣腹でいらつしやつたので、多少軽んじる気持ちもまじつてお思い申し上げていらつしやつた。

人柄も、普通の人と比較すれば、感じはこの上なくよくていらつしやるが、はじめから思い込んでいた方がやはり深かつたのであろう、慰められない嫉捨で、人に見咎められない程度に、お世話申し上げていらつしやつた。今なお、あの内心の思いを忘れることができず、小侍従という相談相手は、宮の御侍従の乳母の娘だつた。その乳母の姉があゝの衛門督の君の御乳母だつたので、早くから親しくご様子を伺つていて、まだ宮が幼くいらつしやつた時から、とてもお美しくいらつしやるとか、帝が大事にしていらつしやるご様子など、お聞き申して、このよつな思いもついたのであつた。

### 「第二段 柏木、小侍従を語らう」

こうして、院も離れていらつしやる時、人目が少なくひっそりした時を推量して、小侍従を度々迎えては、懸命に相談をもちかける。

昔から、このように寿命も縮むほどに思つて、このよつな親しい手づるがあつて、ご様子を伝え聞いて、抑え切れない気持ちをお聞き頂いて、心丈夫にしているのに、全然その甲斐がないので、ひどく辛い。

院の上でさえ、あのように大勢の方々と関わつていらつしやつて、他人に負けておいでのよつで、独りでお寝みになる夜々が多く、寂しく過ごしていらつしやるそつです』などと、人が奏上した時にも、少し後悔なさつて、御様子で、

『同じ降嫁させるなら、臣下で安心な後見を決めるには、誠実にお仕えるよつな人を決めるべきであつた』と、仰せになつて、女二の宮が、かえつて安心で、将来長く幸福にお暮らしなさるよつだ』

と、仰せになつたのを伝え聞いたが、お気の毒にも、残念にも、どんなに思い悩んだことだらうか。

なるほど、同じご姉妹を頂戴したが、それはそれで別のことに思えるのだ』と、思わず溜息をお漏らしになるので、小侍従は、

『まあ、何と、大それたことを。その方を別事とお置き申し上げなつて、さらにまた、なんと途方もないお考えをお持ちなのでしょう』

と、言つと、ちよつとほほ笑んで、

『そつではあつた。宮に恐れ多くも求婚申し上げたことは、院にも帝にもお耳にあそばしていらつしやるのだ。どうして、そつとして相応しからぬことがあるよつと、何かの機会に仰せになつたのだ。いやなに、ただ、もつ少しご慈悲を掛けて下さつたならば』

などと言つと、

『とてもお難しいことですね。ご宿運とか言つことがございますのに、それが本となつて、あの院が言葉に出して丁重に求婚申し上げなつたのに、同じよつに張り合つてお妨げ申し上げることがおできになるほどのご威勢であつたと思ひでしたか。最近、少し貴祿もつき、ご衣装の色も濃くおなりになりましたが』

と言つので、言いようもなく遠慮のない口達者さに、最後までおっしゃり切れないで、

「今はもうよい。過ぎたことは申し上げまい。ただ、このようにめつたにない人目のない機会に、お側近くで、わたしの心の中に思っていることを、少しでも申し上げられるようにとり計らつて下さい。大それた考えは、まったく、まあ見て下さい、たいそう恐ろしいので、思つてもおりません」とおっしゃると、

「これ以上大それた考えは、他に考えられますか。何とも恐ろしいことをお考えになつたことですよ。どうして何つたのでしょう」と、口を尖らせる。

「第三段 小侍従、手引きを承諾」

「まあ、何と、聞きにくいことを。あまり大げさな物の言い方をなさるといふものだ。男女の縁は分からないものだから、女御、后と申しても、事情がつて、情を交わすことがないわけではあるまい。まして、その宮のご様子。思えば、たいそう又となく立派であるが、内情は面白くないことが多くあることだろう。」

院が、大勢のお子様方の中で、他に肩を並べる者が無いほど大切にお育て申し上げておいででしたのに、さほど同列とは思えないご夫人方の中にたち混じつて、失礼に思つようなことがあるに違いない。何もかも知つておりますよ。世の中は無常なものですから、一概に決めつけて、取り付く島もなく、ぶつきらばうにおっしゃるものではないよ」とおっしゃるので、

「他の人から負かされていらつしやるご境遇だからと言って、今さら別の結構な縁組をなさるといふわけにも行きませぬ。このご結婚は世間一般の結婚ではございませんでしょう。ただ、ご後見がなくて頼りなくお暮らしになるよりは、親代わりになつて頂こう、というお譲り申し上げなされたご結婚なので、お互いにそのように思い合つていらつしやるようです。つまらない悪口をおっしゃるものです。」

と、しまいには腹を立てるが、いろいろと言いなだめて、

「本当は、そのように世に又とないご様子を日頃拝見していらつしやるお方に、人数でもない見すばらしい姿を、気を許して御覧に入れようとは、まったく考えていないことです。ただ一言、物越しに申し上げただけで、どれほどのご迷惑になることがありましよう。神仏にも思つていることを申し上げるのは、罪になることでしょうか。」

と、大変な誓言を繰り返しおっしゃるので、暫くの間は、まったくんでもないことだと断つていたが、思慮の足りない若い女は、男がこのように命に代えてたいそう熱心にお頼みになるので、断り切れずに、

「もし、適当な機会があつたら、手立ていたしましよう。院がいらつしやらない夜は、御帳台の回りに女房が大勢仕えていて、お寝みになる所には、しかるべき人が必ず伺候していらつしやるので、どのような機会に、隙を見つけたらよいのだろう」と、

と、困りながら帰参した。

「第四段 小侍従、柏木を導き入れる」

どうなのか、どうなのかと、毎日催促され困つて、適当な機会を見つけて出して、手紙をよこした。喜びながら、ひどく粗末で目立たない姿でいらつしやつた。

本当に、自分ながらまことに善くないことなので、お側近くに参つて、かつて煩悶が勝ることまでは、考えもしないで、ただ、

「ほんの微かにお召し物の端だけを拝見した春の夕方が、いつまでも思い出されなさるご様子を、もう少しお側近くで拝見し、思つている気持ちをお聞かせ申し上げたら、ほんの一刻たりほどのお返事だけでも下さりはしまいか、かわいそうだと思うつては下さらないだろうか。」

と思つのであつた。

四月十日過ぎのことである。御襖が明日だと言って、齋院に差し上げなされる女房を十二人、特別に上臈ではない若い女房、女の童など、それぞれ裁縫をしたり、化粧などをしてほしい、見物をしようとする準備するのも、それぞれに忙しそうで、御前の方がひっそりとして、人が多くない時であつた。

側近くに仕えている按察の君も、時々通つて来る源中将が、無理やり呼

び出させたので、下がっている間に、ただこの小侍徒だけが、お側近くには伺候しているのであった。ちようど良い機会だと思つて、そつと御帳台の東面の御座所の端に座らせた。そんなにまですべきことであろうか。

「第五段 柏木、女三の宮をかき抱く」

宮は、無心にお寝みになつていらつしやつたが、近くに男性の感じがするので、院がいらつしやつたとお思ひになつたが、かしこまつた態度で、浜床の下に抱いてお下ろし申したので、魔物に襲われたのかと、やつとの思いで目を見開きなざると、違う人なのであった。

妙なわけも分からないことを申し上げるではないか。驚いて恐ろしくなつて、女房を呼ぶが、近くに控えていないので、聞きつけて参上する者もない。震えていらつしやる様子、水のように汗が流れて、何もお考えにならない様子、とてもいじらしく可憐な感じである。

「人数の者ではありませんが、まことにこんなにまでも軽蔑されるべき身の上ではないと、存ぜずにはいられません。」

昔から身分不相応の思ひがございましたが、一途に秘めたままにしておきましたら、心の中に朽ちて過ぎてしまつたでしょうが、かえつて、少し願いを申し上げさせていたただいたところ、院におかせられても御承知おきあそばされましたが、まつたく問題にならないように仰せにはならなかつたので、望みを繋ぎ始めまして、身分が一段劣つていたがために、誰よりも深くお慕ひしていた気持ちが無駄なものにしてしまつたことと、残念に思うようになりました気持ちですが、すべて今では取り返しのつかないことと思ひ返しはいたしますが、どれほど深く取りついでしまつたことなのか、年月と共に、残念にも、辛いとも、気味悪くも、悲しくも、いろいろと深く思ひがつのることに、堪えかねて、このように大それた振る舞いをお目にかけてしまいましたのも、一方では、まことに思慮浅く恥ずかしいので、これ以上大それた罪を重ねようという気持ちはまつたくございません」

と云ひ続けるうちに、この人だつたのだとお分りになると、まことに失礼な恐ろしいことに思われて、何もお返事なさらない。

「まことにまつともなごですが、世間に例のないことではございません

のに、又とないほどな無情なご仕打ちならば、まことに残念で、かえつて向こう見ずな気持ちも起こりましようから、せめて不憫な者よとだけでもおつしやつて下されば、その言葉を承つて退出しましよつ」と、さまざまに申し上げなされる。

「第六段 柏木、猫の夢を見る」

はたから想像すると威厳があつて、馴れ馴れしくお逢ひ申し上げるのもこちらが気が引けるように思われるようなお方なので、ただこのように思ひ詰めているほんの一部を申し上げて、なまじ色めいた振る舞いはしないでおこう」と思つていたが、実際それほど気品高く恥ずかしくなるような様子ではなくて、やさしくかわいらしくて、どこまでももの柔らかな感じにお見えになるご様子で、上品で素晴らしく思えることは、誰とも違つて感じいらつしやるのであった。

賢明に自制していた分別も消えて、どこへなりとも連れて行つてお隠し申して、自分もこの世を捨てて、姿を隠してしまいたい」とまで思ひ乱れた。ただちよつとまどろんだとも思われぬ夢の中に、あの手なずけた猫がともかわいらしく鳴いてやつて来たのを、この宮にお返し申し上げようとして、自分が連れて来たように思われたが、どうしてお返し申し上げようとしたのだらうと思つているうちに、目が覚めて、どうしてあんな夢を見たのだらう、と思つた。

宮は、あまりにも意外なことで、現実のことともお思ひになれないので、胸がふさがる思ひで、途方に暮れていらつしやるのを、

「やはり、このように逃れられないご宿縁が、浅くなつたのだとお思ひ下さい。自分ながらも、分別心をなくしたように、思われます。」

あの身に覚えのなかつた御簾の端を、猫の綱が引いた夕方のこともお話し申し上げた。

「なるほど、そうであつたことなのか」

と、残念に、前世からの宿縁が辛い御身の上なのであつた。院にも、今はどうしてお目にかかることができようか」と、悲しく心細くて、まるで子供のようにお泣きになるのを、まことに恐れ多く、いとしく拝見して、相

手のお涙までを拭う袖は、ますます露けさがまざるばかりである。

「第七段 きぬぎぬの別れ」

夜が明けてゆく様子であるが、帰って行く気にもなれず、かえって逢わないほうがましであったほどである。

「いったい、どうしたらよいのでしょうか。ひどくお憎みになっていらつしやるので、再びお話し申し上げることも難しいでしょうが、ただ一言だけでもお声をお聞かせ下さい。」

と、さまざまに申し上げて困らせるのも、煩わしく情けなくて、何もまったくおしゃれないので、

「しまいには、薄気味悪くさえなつてしまいました。他に、このような例はありません。」

と、まことに辛いとお思い申し上げて、  
「それでは生きていても無用のようです。いつそ死んでしまひましょう。生きていたからこそ、こうしてお逢いもしたのです。今晚限りの命と思つとたいそう辛うございます。少しでもお心を開いて下さるならば、それを引き換えにして命を捨ててもしましようが」

と云つて、抱いて外へ出るので、しまいにはどうするのだろうと、呆然としていらつしやる。

隅の間の屏風を広げて、妻戸を押し開けると、渡殿の南の戸の、昨夜入つた所がまだ開いたままになっているが、まだ夜明け前の暗いころなのであるう、ちらつと拝見しようとの気があるので、格子を静かに引き上げて、

「このように、まことに辛い無情なお仕打ちなので、正気も消え失せてしまいました。少しでも気持ち落ち着けるようにお思いならば、せめて一言かわいそうにとおつしやつて下さい。」

と、脅して申し上げると、とんでもないとお思ひになつて、何かおつしやるうとなさつたが、震えるばかりで、ほんとうに子供っぽい様子である。

ただ夜が明けて行くので、とても気が急かれて、

「しみじみとした夢語りも申し上げたいのですが、このようにお憎みになつていらつしやるので。そうは言つても、やがてお思い当たりなさることも

「ぞいましゅう」

と云つて、氣ぜわしく出て行く明けぐれ、秋の空よりも物思ひをさせるのである。

「起きて帰って行く先も分からない明けぐれに、どこから露がかかつて袖が濡れるのでしゅう」

と、袖を引き出して訴え申し上げるので、帰って行くのだろうと、少しほつとなさつて、

「明けぐれの空にこの身は消えてしまひたいものです。夢であつたと思つて済まされるようじ」

と、力弱くおつしやる声が、若々しくかわいらしいのを、聞きも果てないようにして出てしまつた魂は、ほんとうに身を離れて後に残つた気がする。

「第八段 柏木と女三の宮の罪の恐れ」

女宮のお側にもお歸りにならないで、大殿へこつそりとおいでになつた横にはなつたが目も合わず、あの見た夢が当たるかどうか難しいことを思つと、あの夢の中の猫の様子が、とても恋しく思ひ出さずにはいられない。

「それにしても大変な過ちを犯したものだ。この世に生きて行くことさえ、できなくなつてしまつた」

と、恐ろしく何となく身もすくむ思いがして、外歩きなどもなさらない。女のお身の上は言うまでもなく、自分を考えてもまことにけしからぬ事という中でも、恐ろしく思われるので、氣ままに出歩くことはとてもできない。帝のお妃との間に間違いを起こして、それが評判になつたような時に、これほど苦しい思いをするなら、そのために死ぬことも、苦しくないことだらう。それほど、ひどい罪に当たらなくても、この院に睨まれ申すことは、まことに恐ろしく目も合わせられない気がする。

この上ない高貴な身分の女性とは申し上げても、少し夫婦馴れた所もあつて、表面は優雅であつとりしていても、心中はそうでもない所があるのは、あれやこれやの男の言葉に靡いて、情けをお交わしなさる例もあるのだが、この方は深い思慮もあつてないが、ひたすら恐がりなさるご性質なので、もう今にも誰かが見つけたり聞きつけたりしたかのように、目

も上げられず、後ろめたくお思いなざるので、明るい所へいざり出なさることさえおできになれない。まことに情けないわが身の上だと、自分自身お分りになるのであろう。

「気分がすぐれない、とあつたので、大殿はお聞きになって、たいそうお心をお尽くしになるご看病に加えて、またどうしたことかとお驚きあそばして、お渡りになった。」

どこそこと苦しそうな事もお見えにならず、とてもひどく恥ずかしがり沈み込んで、まともにお顔をお合わせ申されないので、長くなつた絶え間を恨めしくお思いになつていらつしやるのか」と、お氣の毒に思つて、あちらの病状などをお話し申し上げなされて、

「もう最期かも知れません。今になつて薄情な態度だと思われまいと思ひましてね。幼いころからお世話して来て、放つて置けないので、このように幾月も何もかもうち忘れて看病して来たのですよ。いつか、この時期が過ぎたら、きつとお見直し頂けるでしょう。」

などと申し上げなされる。このようにお気づきでないのも、お氣の毒にも心苦しくもお思いになつて、宮は人知れずつい涙が込み上げてくる。

#### 「第九段 柏木と女二の宮の夫婦仲」

督の君は、宮以上に、かえつて苦しさがまさつて、寝ても起きても明けも暮れても目を暮らしかねていらつしやる。祭の日などは、見物に先を争つて行く公達が連れ立つて誘うが、悩ましそうにして物思いに沈んで横になつていらつしやつた。

女宮を、丁重にお扱い申しているが、親しくお逢い申されることもほとんどなさらず、「自分の部屋に離れて、とても所在なさそうに心細く物思いに耽つていらつしやるところに、女童が持っている葵を御覧になつて、悔しい事に罪を犯してしまつたことよ。神が許した仲ではないのに。」

と思つにつけても、まことになまじ逢わないほうがましな思ひである。

世間のにぎやかな車の音などを、他人事のように聞いて、我から招いた物思いに、一日が長く思われる。

女宮も、このよつな様子のつまらなさそうなのがお分かりになるので、ど

のよつな事情とはお分かりにならないが、気が引け心外なと思われるにつけ、面白くない思ひでいられるのであつた。

女房などは、見物に皆出かけて、人少なでのんびりしているので、物思いに耽つて、箏の琴をやさしく弾くともなしに弾いていらつしやるご様子も、内親王だけあつて高貴で優雅であるが、「同じ皇女を頂くなら、もう一段及ばなかつた運命よ」と、今なお思われる。

「劣つた落葉のような方をどうして娶つたのだらう。同じ院のご姉妹ではあるが」

と遊び半分には書いているのは、まこと失礼な蔭口である。

#### 第八章 紫の上の物語 死と蘇生

##### 「第一段 紫の上、絶命す」

大殿の君は、たまたまお渡りになつて、すぐにはお帰りになることもできず、落ち着いていらつしやれないところに、

「息をお引きとりになりました」

と云つて、使者が参上したので、まつたく何を考えることもおできになれず、お心も真暗になつてお帰りになる。その道中気が氣でないところ、なるほどあちらの院は、周囲の大路まで人が騒ぎ立つていた。邸の中の泣きわめいている様子、まことに不吉である。無我夢中で中にお入りになると、「このところ数日は、少しよろしいようにお見えになつたのですが、急に、このようにおなりになりました」

と云つて、控えている女房たちは皆、自分も後を追おうと、うろろろしている者たちが、数限りない。いく壇もの御修法の壇を壊して、僧たちも残るべき人は残っているが、ばらばらと立ち騒ぐのを御覧になると、「それではもう最期なのだ」とお思い切りなさるその情けなさに、他にどのような比べるものがあるうか。

「それは云つても、物の怪のすることであるう。まことに、そんなにむやみに騒ぐな」

と皆をお静めになつて、ますます大層なくつもの願をお立て加えさせなされる。すぐれた験者たちをすべて召し集めて、

「有限なご寿命であるから、この世でのご寿命が終わつたとしても、ただ、もう暫く延ばして下さい。不動尊の御本の誓いがあります。せめてその日数だけでも、この世にお引き止め申して下さい」

と、頭から本当に黒い煙を立てて、大変な熱心さでご加持申し上げる。院も、

「ただ、もう一度目と目を見合わせて下さい。まったくあつけなく臨終の時をさえ、会わずじまいであつたことが、悔しく悲しいのですよ」

と取り乱している様子は、生き残つていらつしやることができそうにないのを、拝見する心地は、ただ想像できよう。大変なご悲痛を、仏も御照覧されたのであろうか、このいく月もまったく現れなかつた物の怪が小さい童に乗り移つて、大声でわめくうちに、だんだんと生き返つていらつしやつて、嬉しくも不吉にもお心が騒がずにはいらつしやれない。

## 「第二段 六条御息所の死霊出現」

ひどく調伏されて、

「他の人は皆去りなさい。院お一人方のお耳に申し上げたい。自分をこのいく月も調伏し困らせなされるのが薄情で辛いので、同じことならお知らせしようと思つたが、そうは言つても命が耐えられないほど、身を粉にして悲嘆に暮れていらつしやるご様子を拝見すると、今でこそ、このようなあさましい姿に変わつてはいるが、昔の愛執が残つていればこそ、このように参上したので、お気の毒な様子を放つて置くことができなくて、とうとう現れ出てしまつたのです。決して知られまいと思つていたのに」

と言つて、髪を振り掛けて泣く様子は、まったく昔御覧になつた物の怪の恰好と見えた。こんなことがこの世にあるうか、恐ろしいことだと、心底お思い込みになつたことが相変わらず忌まわしいことなので、この童女の手を捉えて、じつとさせて、体裁の悪いようにはおさせにならない。

「本当にあなたか。良くない狐などと言うもので、気の狂つたのが、亡くなつた人の不名誉になることを言い出すということもあると言うから、はつき

りと名乗りをせよ。また誰も知らないようなことで、心にはつきりと思ひ出されるようなことを言いなさい。そうすれば、少しは信じましょう」

とおつしやると、ぼろぼろとひどく泣いて、

「わたしはこんな変わりはてた身の上となつてしまつたが、知らないふりをするあなたは昔のままですね。とてもひどい方だわ、とてもひどい方だわ」と泣き叫ぶ一方で、そうはいつても恥ずかしがつている様子、昔に変わらず、かえつてまことに疎ましい気がし、情けないので、何も言わせまいとお思ひになる。

「中宮の御事につけても、大変に嬉しく有り難いことだと、魂が天翔りながら拝見してはいますが、明幽境を異にしてしまつたので、子の身の上までも深く思われないのでしょうか、やはり、自分自身がひどい方だと思ひ申し上げた方への愛執が残るのでした。

その中でも、生きているうちに、人より軽にお扱いをなさつてお見捨てになつたことよりも、お親しい者どうしのお話の時に、性格が善くない扱ひにくい女であつたとおつしやつたのが、まことに恨めしくて。今はもう亡くなつてしまつたのだからとお許し下さつて、他人が悪口を言うのでさえ、打ち消しかばつて戴きたいと思つと、その思つただけで、このように恐ろしい身の上なので、このように大変なことになつたのです。

この方を、心底憎いと思ひ申すことはないが、あなたの神仏の加護が強くて、とてもご身辺は遠い感じがして、近づき参ることができず、お声さえもかすかに聞くだけでおります。

よし、今はもう、この罪障を軽めることをなさつて下さい。修法や読経の大声を立てることも、わが身には苦しく情けない炎となつてまつわりつくばかりで、まったく尊いお経の声も聞こえないので、まことに悲しい気がします。

中宮にも、この旨をお伝え申し上げて下さい。決して御宮仕え中に、他人と争つたり嫉妬したりする気をお持ちになつてなりません。齋宮でいらつしやつたころのご罪障を軽くするような功德のことを、必ずなさるようになつて残念なことでしたよ」

などと、言い続けるが、物の怪に向かつてお話なさることも、気が引けることなので、物の怪を封じ込めて、紫の上を、別の部屋に、こつそりお



移し申し上げなさる。

「第三段 紫の上、死去の噂流れる」

このようにお亡くなりになったという噂が、世間に広がって、ご甲問に参上なさる方々がいるのを、まことに縁起でもなくお思いになる。今日の祭の翌日の行列の見物にお出かけになった上達部などは、お帰りになる道すがら、このように人が申すので、

「大変な事になったな。」この世の生甲斐を満喫した幸福な方が、光を失う日なので、雨がしょぼしょぼ降るのだな」

と、思いつきの発言をなさる方もいる。また、

「このようにすべてに満ち足りた方は、必ず寿命も長くはないことです。何を桜に」と言う古歌もあることよ。このような方が、ますます世に長生きをして、この世の楽しみを尽くしたら、はたの人が迷惑するだろう。これでやっと、二品の宮は、本来のご寵愛をお受けになれることだろう。お気の毒に圧倒されていたご寵愛であったから」

などと、ひそひそ噂するのであった。

衛門督は、昨日一日とても過ごしにくかったことを思って、今日は、弟の方々の、左大弁、藤宰相など、車の奥の方に乗せて見物なされた。このように噂しあっているのを聞くにつけても、胸がどきつとして、

「どうして嫌な世の中に長生きしようか」と、独り口ずさんで、あちらの院に皆で参上なさる。不確かなことなので縁起でもないことを言っは、と思っ、ただ普通のお見舞いの形で参上したところ、このように人が泣き叫んでいるので、本当だったのだなと驚きなされた。

式部卿宮もお越しになって、とてもひどく悲嘆なされた様子でお入りになる。一般の方々のご甲問も、お伝え申し上げることがおできになれない。大将の君が、涙を拭って出ていらっしやうたので、

「いかがですか、いかがですか。縁起でもないふうに皆が申しましたので、信じがたいことです。ただ長い間のご病氣と承って嘆いて参上しました」  
などとおっしゃる。

「大変に重態になって、月日を送っていらっしやうたが、今日の夜明け方から息絶えてしまわれましたが、物の怪の仕業でした。だんだんと息を吹き返しなされたふうに聞きまして、今ちようど皆安心したようですが、まだとても気がかりでなりません。おいたわしい限りです」

と言っ、本当にひどくお泣きになるご様子である。目も少し腫れている。衛門督は、自分のけしからぬ気持ちに照らしてか、この君が、大して親しい関係でもない継母のご病氣を、ひどく悲嘆していらっしやるなど、目を止める。

このように、いろいろな方々がお見舞いに参上なされた旨をお聞きになつて、

「重病人が、急に息を引き取つたふうになったのですが、女房たちは、冷静さを失つて、取り乱して騒ぎましたが、自分自身も落ちつきをなくして、取り乱しております。後日改めて、このお見舞いにはお礼申し上げます」

とおっしゃった。督の君は胸がどきつとして、このようなのっぴきならぬ事情がなければ参上できそうになく、何がなし恐ろしい気がするのも、心中後ろめたいところがあるからなのであった。

「第四段 紫の上、蘇生後に五戒を受く」

このように生き返りなされた後は、恐ろしくお思いになって、再度、大変ないくつもの修法のあらん限りを追加して行わせなされる。

生きていた時の人でさえ、嫌な気がしたご様子の方が、まして死後に、異形のものに姿を変えていらっしやるのだらうことをご想像なされると、まことに気味が悪いので、中宮をお世話申し上げなされることまでが、この際は億劫になり、せんじつめれば、女性の身は、皆同様に罪障の深いものだとして、少しお話し出しになったことを言い出したので、確かにそうだと思出しになると、まことに厄介なことと思わずにはいらっしやれない。

御髪を下ろしたいと切望なされているので、持戒による功德もあろうかと考えて、頭の頂を形式的に挟みを入れて、五戒だけをお受けさせ申し上げなされる。御戒の師が、持戒のすぐれている旨を仏に申すにつけても、し

みじみと尊い文句が混じっていて、体裁が悪いまでお側にお付きなさって、涙をお拭いになりながら、仏と一緒に念じ申し上げなさる様子は、この世に又となく立派でいらつしやる方も、まことにこのようにご心痛になる非常時に当たっては、冷静ではいらつしやれないものであつた。

どのような手立てをしてでも、この方をお救い申しこの世に引き止めておこうとばかり、昼夜お嘆きになつていたので、ぼつととするほどになつて、お顔も少しお瘦せになつていた。

「第五段 紫の上、小康を得る」

五月などは、これまで以上に、晴々しくない空模様で、すつきりした気分におなりになれないが、以前よりは少し良い状態である。けれども、やはりずつと絶えることなくお悩みになつてゐる。

物の怪の罪障を救えるような仏事として、毎日法華経を一部ずつ供養させなさる。毎日何やかやと尊い供養をおさせになる。御枕元近くでも、不断の御読経を、声の尊い人だけを選んでおさせになる。物の怪が正体を現すようになってからは、時々悲しげなことを言うが、まったくこの物の怪がすっかり消え去つたというわけではない。

ますます暑いころは、息も絶え絶えになつて、ますます衰弱なさるので、何とも言いようがないほどお嘆きになつた。意識もないようなご病状の中でも、このようなご様子をお氣の毒に拝見なさつて、

「この世から亡くなつても、わたしには少しも残念だと思われれることはないが、これほどご心痛のようなので、自分の亡骸をお目にかけるのも、いかにも思いやりのないことだから」

と、氣力を奮い起こして、お薬湯などを少し召し上がったせいか、六月になつてからは、時々頭を枕からお上げになつた。珍しいことと拝見なさるにつけても、やはり、とても危なそうなので、六条院にはわずかの間でもお出向きになることができない。

「第一段 女三の宮懐妊す」

姫宮は、わけの分からなかつた出来事をお嘆きになつて以来、そのまま普通のお具合ではいらつしやらず、苦しうにしておいでであつたが、そのうひどい状態でもなく、先月から、食べ物をお召し上がりにならず、ひどく蒼ざめてやつれていらつしやる。

あの人は、無性に我慢ができない時々には、夢のようにお逢い申し上げたが、宮は、どこまでも無体なことだと思ひになつていた。院をひどくお恐がり申されるお気持ちから、態度も人品も、同等に見られようか、たいそう風流っぽく優美にしているので、一般の目には、普通の人以上に誉められるが、幼い時から、そのように類例のないご様子の方に馴れ親しんでいらつしやるお心にとつては、心外な者とばかり見ていらつしやるうちに、このようにずつとお悩みになることは、氣の毒なご運命であつた。

御乳母たちは懐妊の様子に気がついて、院がお越しになることも実にたまにでしかないのを、ぶつぶつお恨み申し上げる。

このようにお苦しみでいらつしやるとお聞きになつてお出かけになる。女君は、暑く苦しいとつて、御髪を洗つて、少しさわやかにしていらつしやつた。横になりながら髪を投げ出していらつしやつたので、すぐには乾かないが、少しもふくらんだり、乱れたりした毛もなくて、実に清らかにゆらゆらとたつぷりあつて、蒼く瘦せていらつしやるのが、かえつて青白くかわいらしげに見え、透き透つたように見えるお肌つきなどは、又とないほど可憐な感じである。脱皮した虫の脱殻かのように、まだとても頼りない感じでいらつしやる。

長年お住みにならなかつたので、多少荒れていた院の内、喻えようもないくらい手狭な感じにさえ見える。昨日今日とこのように意識のおありの時に、特別に手入れをさせた遣水、前裁が、急にさわやかに感じられるのを御覧になつても、しみじみと、今まで過ごしてきたことをお思いになる。

「第二段 源氏、紫の上と和歌を唱和す」

池はとて涼しそつで、蓮の花が一面に咲いているところに、葉はとても青々として、露がきらきらと玉のように一面に見えるのを、

「あれを御覧なさい。自分ひとりだけ涼しそつにしているね」

とおっしゃると、起き上がった外を御覧になるのも、実に珍しいことなので、

「このように拝見するのさえ、夢のような気がします。ひどく、自分自身までが終わりかと思われた時がありましたよ」

と涙を浮かべておっしゃると、自分自身でも胸がいっぱいになって、

「露が消え残っている間だけでも生きられましようか。たまたま蓮の露がこつしてあるほどの命ですから」

とおっしゃる。

「お約束して置きましょう、この世ばかりでなく来世に蓮の葉の上に、玉と置く露のようにいささかも心の隔てを置きなさいますな」

お出かけになる先は億劫であるが、帝におかれても院おかれても、お耳にあそばすこともあるので、ご病氣と聞いてしばらくたっているの、目の前の病人に心を混乱させていた間、お目にかかることもほとんどなかったの、このような雲の晴れ間にまで引き籠もつていては、とお思い立ちになって、お出かけになった。

「第三段 源氏、女三の宮を見舞う」

宮は、良心の呵責に苛まれて、お会いするのも恥ずかしく、気が引けてお思になると、何かおっしゃるお言葉にも、お返事申し上げなさいないので、長い間会わずにいたことを、そつと言わなければと辛くお思いになっているのだと、お気の毒なので、あれやこれやとお慰めになる。年輩の女房を召して、ご気分の様子などをお尋ねになる。

「普通のお身体ではいらつしやいません」

と、ご気分のすべねない様子を申し上げる。

「妙だな。今ごろになつてご妊娠だとは」

とだけおっしゃつて、ご心中には、長年連れ添った妻たちでさえそのよつなことはなかつたのに、不確かなことなので、どうなのか」

とお思いなさるので、特にあれこれとおっしゃらずに、ただ、お苦しんでいらつしやる様子がとても痛々しげなのを、いたわしく拝見なさる。

やつこのこととお思い立ちになつてお越しになったので、すぐにはお帰りになることはできず、二、三日いらつしやる間、どうしているだろうか、どうしているだろうか、と気がかりにお思いになるので、お手紙ばかりをこまごまとお書きになる。

「いつの間にたくさんお言葉が溜るのでしよう。まあ、何と、心配でならぬこと」

と、若君の御過ちを知らない女房は言う。侍従だけは、このようなことにつけても胸騒ぎがするのであつた。

あの人も、このようにお越しになつていと聞くと、大それた考え違いを起こして、大層な訴え事を書き綴つておよこしになつた。対の屋にちよつとお渡りになつている間に、人少なであつたので、こつそりとお見せ申し上げる。

「厄介な物を見せるのは、とても辛いわ。気分がますます悪くなりますから」

と言つてお臥せになつているので、

でも、ただ、このはしがきが、お気の毒な気がいたしますよ」

と言つて、広げたところへ誰か参つたので、まこと困つて、御几帳を引き寄せて出て行つた。

「第四段 源氏、女三の宮と和歌を唱和す」

夜になつてから、二条院にお帰りになろうとして、ご挨拶を申し上げなさる。

「ごちらには、お具合は悪くないようにお見えですが、まだとても頼りなさつたのを、放つて置くように思われますの、今さらお気の毒なので。悪く申す者がありまして、決してお気になさいますな。やがてきつとお分りになりましよう」

とお慰めになる。いつもは、子供つばい冗談事などを、気楽に申し上げ

なさるのだが、ひどく沈み込んで、ちゃんと目をお合わせ申すこともなさらないのを、ただ側にいないのを恨んでいらつしやるのだとお思いなさる。昼の御座所に横におなりになって、お話など申し上げているうちに日が暮れてしまった。少しお寝入りになってしまったが、ひぐらしが派手に鳴いたのに目をお覚ましになって、

「それでは、道が暗くならない間に」

と言つて、お召し物などをお召し替えになる。

「月を待つて、と言つてさうですか」

と、若々しい様子でおっしゃるのはとてもいじらしい。その間でも、とお思いなのだろうか」と、いじらしくお思いになって、お立ち止まりになる。

「夕露に袖を濡らせといつてもりで、ひぐらしが鳴くのを、聞きながら起きて行かれるのでしょうか」

子供のようなあどけないままにおっしゃったのもかわいらしいので、膝をついて、

「ああ、困りましたこと」

と、溜息をおつきになる。

「わたしを待つているほうでもどのように聞いているでしょうか。それぞれに心を騒がすひぐらしの声ですね」

などご躊躇なさつて、やはり無情に帰るのもお気の毒なので、お泊まりになった。心は落ち着かず、そうは言つても物思いにお耽りになって、果物類だけを召し上がりなどなさつて、お寝みになった。

「第五段 源氏、柏木の手紙を発見」

まだ朝の涼しいうちにお帰りにならうとして、早くお起きになる。

「昨夜の扇を落として。これでは風がなま温いな」

と言つて、御衾をお置きになって、昨日うたた寝なされた御座所の近辺を、立ち止まつてお探しになると、御褥の少し乱れている端から、浅緑の薄様の手紙で、押し巻いてある端が見えるのを、何気なく引き出して御覧になると、男性の筆跡である。紙の香りなどはとても優美で、気取つた

書きぶりである。「一枚にこまこまと書いてあるのを御覧になると、紛れようもなく、あの人の筆跡である」と御覧になった。

お鏡の蓋を開けて差し上げる女房は、やはり殿が御覧になるはずの手紙であるうと、事情を知らないが、小侍従はそれを見つけて、昨日の手紙と同じ色と見ると、まことにたいそう、胸がどきどき鳴る心地がする。お粥などを差し上げる方には見向きもせず、

「いいえ、いくら何でも、それはあるまい。本当に大変で、そのようなことがあるうか。きつとお隠しになつたことだろう」

と、思ひ込む。

「何と、幼いのだろう。このような物をお散らかしになつて。自分以外の人が見つけたら」

とお思いになるにつけても、見下される思いがして、

「やはりさうであつたか。本当に奥ゆかしいところがなにご様子を、不安であると思つていたので」

とお思いになる。

「第六段 小侍従、女三の宮を責める」

お帰りになつたので、女房たちが少しばらばらになつたので、侍従が側に寄つて、

「昨日のお手紙は、どのようにあそばしましたか。今朝、院が御覧になつていた手紙の色が、似ておりましたが」

と申し上げると、意外なことに驚きなさつて、涙が止めどもなく出て来るので、お気の毒に思つ一方で、「何とも言いようのない方だ」と押し上げる。

「どこに、お置きあそばしましたか。女房たちが参つたので、子細ありげに近くに控えておりまいと、ちよつとしたぐらゐの用心でさえ、気が咎めま

すので慎重にしておりますのに。お入りあそばしました時には、少し間

がございましたが、お隠しあそばたさうと、存じておりました」

と申し上げると、

「いいえ、それがね。見ていた時にお入りになったので、すぐに起き上がることもできないで、褥に差し挟んで置いたのを、忘れてしまったの」

とおっしゃるので、何ともまったく申し上げる言葉もない。近寄つて探すが、どこにもあるはずがない。

「まあ、大変。かの君も、とてもひどく恐れ憚つて、素振りにもお聞かせ申されるようなことがあつたら大変と、恐縮申していられたものを。まだいくらもたたないのに、もうこのようになつてしまつてよ。全体、子供っぽい様子でいらして、人にお姿をお見せあそばしたので、長年あれほどまで忘れることができず、ずっと恨み言を言い続けていらつしやうたが、こつまでなるとは存じませんでした。どちら様のためにも、お気の毒な事でございますわ」

と、遠慮もなく申し上げる。気安く子供っぽくいらつしやるので、ずけずけと申し上げたのであろう。お答えもなさらず、ただ泣いてばかりいらつしやる。とても苦しそうで、まったく何もお召し上がりにならないので、「このようにお苦しみでいらつしやるのを、放つていらつしやうて、今はもうすっかりお治りになつたお方のお世話に、熱心でいらつしやること」と、薄情に思つて言う。

「第七段 源氏、手紙を読み返す」

大殿は、この手紙をやはり不審に思わずにはいらつしやれないので、人の見ていない方で、繰返し御覧になる。伺候している女房の中で、あの中納言の筆跡に似た書き方で書いたのだろうか」とまでお考えになつたが、言葉遣いがはつきりしていて、本人に間違いないことがいろいろと書いてある。

「長年慕い続けてきたことが、偶然に念願が叶つて、心にかかつてならないといつた事を書き尽くした言葉は、まことに見所があつて感心するが、本当に、こんなにまではつきりと書いてよいものだろうか。惜しいことに、あれほどの人が、思慮もなく手紙を書いたものだ。人目に触れることがあつてはいけないと思つたので、昔、このようにこまごまと書きたい時も、言葉を簡略に簡略にして書き紛らわしたものだ。人が用心するということは

難しいことなのだ」

と、その人の心までお見下しなされた。

「第八段 源氏、妻の密通を思つ」

「それにしても、この宮をどのようにお扱いしたら良いものだろうか。おめでたいことのご懐妊も、このようなことのせいだったのだ。ああ、何と、厭わしいことだ。このような、目の当たりに嫌な事を知りながら、今までどおりにお世話申し上げるのだろうか」

と、自分のお心ながらも、とても思い直すことはできないとお思いになるが、

「浮気の遊び事としても、初めから熱心でない女でさえ、また別の男に心を分けていると思つのは、氣にくわなく疎んじられてしまうものなのに、ましてこの宮は、特別な方で、大それた男の考えであることよ。

帝のお妃と過ちを生じる例は、昔もあつたが、それはまた事情が違うのだ。宮仕えと云つて、自分も相手も同じ主君に親しくお仕えするうちに、自然と、そのような方面で、好意を持ち合うようになって、みそか事も多くなるというものだ。

女御、更衣と言つても、あれこれいろいろあつて、どうかと思われる人もおり、嗜みが必ずしも深いとは言えない人も混じつていて、意外なことも起こるが、重大な確かな過ちと分らないうちは、そのまま宮仕えを続けて行くようなこともあるから、すぐには分らない過ちもきつとあることだろう。

このように、又となく大事にお扱い申し上げて、内心愛情を寄せている人よりも、大切な恐れ多い方と思つてお世話しているような自分をさしおいて、このような事を起こすとは、まったく例がない」

と、つい非難せずにはいらつしやれない。

「帝とは申し上げても、ただ素直に、お仕えするだけでは面白くもないので、深い私的な思いを訴えかける言葉に引かれて、お互いに愛情を傾け尽くし、放つて置けない折節の返事をするようになり、自然と心が通い合うようになつた間柄は、同様に良くない事柄だが、まだ理由があるろうか。自分自身

の事ながら、あの程度の男に宮が心をお分けにならねばならないとは思われないのだが」

と、まことに不愉快ではあるが、また、顔色に出すべきことではないなどと、「煩悶なざるにつけても、

「故院の上も、このように御心中には御存知でいらして、知らない顔をあそばしていられたのだらうか。それを思うと、その当時のことは、本当に恐ろしく、あつてはならない過失であつたのだ」

と、身近な例をお思ひになると、恋の山路は、非難できないというお気持ちもなさるのであつた。

## 第十章 光る源氏の物語 密通露見後

「第一段 紫の上、女三の宮を気づかう」

平静を装つていらつしやるが、「煩悶の様子がはつきりと見えるので、女君は、生き返つたのをいじらしそつと思つてこちらにお歸りになつて、自身どうにもならず、宮をお気の毒に思つていらつしやるのだらうか」とお思ひになつて、

「気分は良しくなつておりますが、あちらの宮がお悪くいらつしやいましたように、早くお歸りになつたのが、お気の毒です」

とお申し上げなさるので、

「そつですね。普通のお身体ではないようにお見えになりましたが、別段の病氣というわけでもいらつしやらないので、何となく安心に思つていましたね。宮中からは、何度もお使いがありました。今日もお手紙があつたとか。院が、特別大切になさるようにお頼み申し上げていらつしやるので、主上もそのようにお考えなのでしょう。少しでも宮を疎かになどあるようであれば、お二方がどうお思ひになるかが、心苦しいことです」

と言つて、嘆息なさると、

「帝がお耳にあそばすことよりも、宮自身に恨めしいとお思ひ申し上げなさることのほうが、お気の毒でしょう。自分ではお気になさらずに、

良からぬように陰口を申し上げる女房たちが、きつといるでしょうと思つて、とてもつるつ存じます」

などとおつしやるので、

「なるほど、おつしやるとおり、ひたすら愛しく思つてゐるあなたには、厄介な縁者はいないが、いろいろと思慮を廻らすことといつたら、あれやこれやと、一般の人が思うような事まで考えを廻らされますが、わたしのただ、国王が御機嫌を損ねないかという事だけを気にしているのは、考えの浅いことだな」

と、苦笑して言い紛らわしなさる。お歸りになることは、

「一緒に歸つてよ。ゆっくりと過すことにしよう」

とだけ申し上げなさるのを、

「ごでもう暫くゆっくりしてしましよう。先にお歸りになつて、宮の気分もよくなつたところに、

と、話し合つていらつしやるうちに、数日が過ぎた。

「第二段 柏木と女三の宮、密通露見におのく」

姫宮は、このようにお越しにならない日が数日続くのも、相手の薄情とばかりお思ひであつたが、今では、自分の過失も加わつてつらなつたのだとお思ひになると、院も御存知になつて、このようにお思ひだらうかと、身の置き所のない心地である。

かの人も、熱心に手引を頼み続けるが、小侍従も面倒に思い困つて、このような事が、ありました」と知らせしてしまつたので、まこと驚いて、

「いつの間にそのような事が起つたのだらうか。このような事は、いつまでも続けば、自然と気配だけで感づかれるのではないか」

と思つただけでも、まことに気が引けて、空に目が付いているように思われたが、「ましてあんなに間違ひようもない手紙を御覧になつたのでは」と、顔向けもできず、恐れ多く、居たたまれない気がして、朝夕の、涼しい時もないころであるが、身も凍りついたような心地がして、何とも言いようもない気がする。

「長年、公事でも遊び事でも、お呼び下さり親しくお伺ひしていたものを。誰

よりもこまごまとお心を懸けて下さったお気持ち、しみじみと身にしみて思われるので、あきれはてた大それた者と不快の念を抱かれ申したら、どうして目をお合わせ申し上げることができようか。そうかと言って、ふつとりと参上しなくなるのも、人が変だと思つたろうし、あちらでもやはりそうであつたかと、お思い合わせになろう、それが堪らない」

などと、気がでない思っているうちに、気分もとても苦しくなつて、内裏へも参内なされない。それほど重い罪に当たるはずではないが、身も破滅してしまふような気がするので、「やっぱり懸念していただおりだ」と、一方では自分ながら、まことに辛く思われる。

「考えて見れば、落ち着いた嗜み深い様子がお見えでない方であつた。まず第一に、あの御簾の隙間の事も、あつていいことだらうか。軽率だと、大將が思つていらした様子に見えた事だ」

などと、今になつて気がつくのである。無理してこの思いを冷まそうとするあまり、むやみに非難つけお思い申し上げたいのであろうか。

### 「第三段 源氏、女三の宮の幼さを非難」

「良いことだからと言って、あまり一途におつとりし過ぎていて高貴な人は、世間の事もご存知なく、一方では、伺候している女房に用心なさることもなくて、このようにおいたわしいご自身にとつても、また相手にとつても、大変な事になるのだ」

と、あのお方をお気の毒だと思つ気持ちも、お捨てになることができない。宮はまことに痛々しげにお苦しみ続けなさる様子が、やはりとてもお気の毒で、このようにお見限りになるにつけては、妙に嫌な気持ちに消せない恋しい気持ちが苦しく思われなさるので、お越しになつて、お目にかかりなさるにつけても、胸が痛くおいたわしく思わずにはいらつしゃれない。

御祈祷などを、いろいろとおさせになる。大体のことは、以前と変わらさず、かえつて勞り深く大事にお持てなし申し上げる態度がお加わりさる。身近にお話し合いなさる様子は、まことにすつかりお心が離れてしまつて、体裁が悪いので、人前だけは体裁をつくらつて、苦しみ悩んでばかりなさつているので、ご心中は苦しいのであつた。

そうした手紙を見たともはつきり申し上げなされないのに、「ご自分でもむやみに苦しみ悩んでいらつしゃるのも子供っぽいことである。」

「まことにこんなお人柄である。良い事だとは言つても、あまりに気がかりなほどおつとりし過ぎていてのは、何とも頼りないことだ」

とお思いになると、男女の仲の事がすべて心もとなく、女御が、あまりにやさしく穏やかでいらつしゃるのは、このように懸想するような人は、これ以上にきつと心が乱れることである。女性は、このように内気でなよなよとしているのを、男も甘く見るのだらうか、あつてはならぬが、ふと目にとまつて、自制心のない過失を犯すことになるのだ」とお思いになる。

### 「第四段 源氏、玉鬘の賢さを思う」

「右大臣の北の方が、特にご後見もなく、幼い時から、頼りない生活を流浪するような有様で、ご成人なさつたが、利発で才気があつて、自分も表向きは親のようにしていたが、憎からず思う心がないでもなかつたが、穏やかにさりげなく受け流して、あの大臣が、あのような心ない女房と心を合せて入つて来たときにも、はつきりと受け付けなかつた態度を、周囲の人にも見せて分からせ、改めて許された結婚の形にしてから、自分のほうに落度があつたようにはしなかつた事など、今から思うと、何とも賢い身の処し方であつた。」

宿縁の深い仲であつたので、長くこうして連れ添つてゆくことは、その初めがどのような事情からであつたにせよ、同じような事であつたらうが、自分の意志でしたのだと、世間の人も思い出したら、少しは軽率な感じが加わらうが、本当に上手に身を処したことだ」とお思い出しになる。

### 「第五段 朧月夜、出家す」

二条の尚侍の君を、依然として忘れず、お思い出し申し上げなさるが、こ

のように気がかりな方面の事を、厭わしくお思いになって、あの方のお心弱さも、少しお見下しなされるのだった。

とうとうご出家の本懐を遂げられたとお聞きになってからは、まことにしみじみと残念に、お心が動いて、さうそくお見舞いを申し上げなされる。せめて今出家するだけでも知らせて下さらなかつた冷たさを、心からお恨み申し上げなされる。

「出家されたことを他人事して聞き流していられますでしょうか。わたしが須磨の浦で涙に沈んでいたのは誰ならぬあなたのせいなのですから

いろいろな人生の無常さを心の内に思いながら、今まで出家せずに先を越されて残念ですが、お見捨てになつたとしても、避けがたいご回向の中には、まず第一にわたしを入れて下さると、しみじみと思われます」

などと、たくさんお書き申し上げなされた。

早くからご決意なされた事であるが、この方のご反対に引つ張られて、誰にもそのようにはお表しなさらなかつた事だが、心中ではしみじみと昔からの恨めしいご縁を、何と言つても浅くはお思いになれない事など、あれやこれやお思い出さずにはいらつしやれない。

お返事は、今となってはもうこのようなお手紙のやりとりをしてはならない最後とお思いになると、感慨無量となつて、念入りにお書きになる、その墨の具合などは、実に趣がある。

「無常の世とはわが身一つだけと思つておりましたが、先を越されてしまつたとの仰せを思いますと、おつしやるとおり、尼になつたわたしにどうして遅れをおとりになつたのでしょうか。明石の浦に海人のようなお暮らしをなさつていたあなたが回向は、一切衆生の為のものですから、どうして含まれないことがありますでしょうか」

とある。濃い青鈍色の紙で、櫛に挟んでいらつしやるのは、通例のことであるが、ひどく洒落た筆跡は、今も変わらず見事である。

「第六段 源氏、朧月夜と朝顔を語る」

二条院にいらつしやる時なので、女君にも、今ではすっかり関係が切れてしまつたこととて、お見せ申し上げなされる。

「とてもひどくやつつけられたものです。本当に、気に入くないよ。いろいろと心細い世の中の様子を、よく見過して来たものですよ。普通の世間話でも、ちよつと何か言い交わしあい、四季折々に寄せて、情趣をも知り、風情を見逃さず、色恋を離れて付き合ひのできる人は、齋院とこの君とが生き残つてはいるが、このように皆出家してしまつて、齋院は齋院で、熱心に勧められて、余念なく勤行に精進していらつしやるということだ。

やはり、大勢の女性の様子を見たり聞いたりした中で、思慮深い人柄で、それでいて心やさしい点では、あの方に「匹敵する人はいなかつたなあ。女の子を育てることは、まことに難しいことだ。

宿世などと言うものは、目に見えないことなので、親の心のままにならぬ。成長して行く際の注意は、やはり力を入れねばならないようです。よくぞまあ、大勢の女の子に心配しなくてもよい運命であつた。まだそれほど年を取らなかつたころは、もの足りないことだ、何人もいたらと嘆かわしく思つたことも度々あつた。

若宮を、注意してお育て申し上げて下さい。女御は、物の分別を十分おわきまえになる年頃でなくて、このようにお暇のない宮仕えをなさつていたので、何事につけても頼りないといつたふうでいらつしやるでしょう。内親王たちは、やはりどこまでも人に後ろ指をさされるようなことなくして、一生をのんびりとお過ごしなさるようになつて、不安でない心づかいを、付けたいものです。身分柄、あれこれと夫をもつ普通の女性であれば、自然と夫に助けられるものですが」

などと申し上げなされると、  
「しつかりしたしたご後見はできませんでも、世に生き永らえています限りは、是非ともお世話してさし上げたいと思つておりますが、どうなることでしょうか」

と言つて、やはり何か心細そうと、このように思いどおりに、仏のお勤めを差し障りなくなさつていらっしゃる方を、羨ましくお思い申し上げていらつしやつた。

「尚侍の君に、尼になられた衣装など、まだ裁縫に馴れないうちはお世話すべきであるが、袈裟などはどのように縫うものですか。それを作つて下さい。一領は、六条院の東の君に申し付けよう。正式の尼衣のようでは、見た目



にも疎ましい感じがしよう。そうはいつても、法衣らしいのが分かるのを」などと申し上げなさる。

青鈍の一領を、こちらではお作らせになる。宮中の作物所の人を呼んで、内々に、尼のお道具類で、しかるべき物をはじめとしてご下命なさる。御褥、上蓆、屏風、几帳などのことも、たいそう目立たないようにして、特別念を入れてご準備なさったのであった。

## 第十一章 朱雀院の物語 五十賀の延引

「第一段 女二の宮、院の五十の賀を祝う」

こうして、山の帝の御賀も延期になって、秋にとあつたが、八月は大将の御忌月で、楽所を取り仕切られるには、不都合であろう。九月は、院の太后がお崩れになつた月なので、十月にとご予定を立てたが、姫宮がひどくお悩みになつたので、再び延期になつた。

衛門督がお引き受けになつている宮が、その月には御賀に参上なさつたのだった。太政大臣が奔走して、盛大にかつこまごまと気を配つて、儀式の美々しさ、作法の格式の限りをお尽くしなさつていた。督の君も、その機会には、気力を出してご出席なさつたのだった。やはり、気分がすぐれず、普通と違つて病人のように日を送つてばかりいらつしやる。

宮も、引き続き何かと気がめいつて、ただつらいとばかりお思い嘆いていられるせいであるうか、懐妊の月数がお重なりになるにつれて、とても苦しうにいらつしやるので、院は、情けないとお思い申し上げなさる気持ちはあるが、とても痛々しく弱々しい様子をして、このようにずつとお悩みになつていらつしやるのを、どのようにおなりになることかと心配で、あれこれとお心をお痛めになられる。ご祈祷など、今年は取り込み事が多くてお過ごしになる。

「第二段 朱雀院、女三の宮へ手紙」

お山におかせられてもお耳にあそばして、いとおしくお会いしたいとお思い申し上げなさる。いく月もあのように別居していて、お越しになることもめつたにないように、ある人が奏上したので、どうしたことにかとお胸が騒いで、俗世のことも今さらながら恨めしくお思いになつて、

「対の方が病氣であつたころは、やはりその看病でとお聞きになつてでさえ、心穏やかではなかつたのに、その後、変わらぬにいらつしやるとは、そのころに、何か不都合なことが起きたのだろうか。宮自身に責任がおありのことでもなくとも、良くないお世話役たちの考えで、どんな失態があつたのだろうか。宮中あたりなどで、風雅なやりとりをし合う間柄などでも、けしからぬ評判を立てる例も聞こえるものだ」

とまでお考えになるのも、肉親の情愛はお捨てになつた出家の生活だが、やはり親子の愛情は忘れ去りがたくて、宮にお手紙を心をこめて書いてあつたのを、大殿も、いらつしやつた時なので、御覧になる。

「特に用件もないので、たびたびはお便りを差し上げなかつたうちに、あなたの様子も分からないままに歳月が過ぎるのは、気がかりなことです。お具合がよろしくなくいらつしやるという様子は、詳しく聞いてからは、念仏誦経の時にも気にかかつてならないが、いかがいらつしやいますか。ご夫婦仲が寂しくて意に満たないことがあつても、じつと堪えてお過ごしなさい。恨めしそうな素振りなどを、いい加減なことで、心得顔にほのめかすのは、まことに品のないことです」

などと、お教え申し上げていらつしやつた。

まことにお気の毒で心が痛み、このような内々の宮の不始末を、お耳にあそばすはずはなく、わたしの怠慢のせいにと、御不満にばかりお思いあそばすことだろう」とばかりにお思い続けて、

「このお返事は、どのようにお書き申し上げますか。お気の毒なお手紙で、わたしこそとても辛い思いです。たとえ心外にお思い申す事があつたとしても、疎略なお扱いをして、人が変に思うような態度はとるまいと思つております。誰が申し上げたのでしようか」

とおつしやる、恥ずかしそうに横を向いていらつしやるお姿も、まことに痛々しい。ひどく面やつれして、物思いに沈んでいらつしやるのは、ますます上品で美しい。

「とても幼い御気性を御存知で、たいそう御心配申し上げていらつしやるのだと、拝察されますので、今後もしるいと心配でなりません。こんなにまでは決して申し上げまいと思いましたが、院の上が、御心中にわたしが背いているとお思いになろうことが、不本意であり、心の晴れない思いであるが、せめてあなたにだけは申し上げておかなくてはと思ひまして。

思慮が浅く、ただ、人が申し上げるままにばかりお従いになるようなあなたとしては、ただ冷淡で薄情だとばかりお思いで、また、今ではわたしのすつかり年老いた様子も、軽蔑し飽き飽きしてばかりお思いになつていられるらしいのも、それもこれも残念にも忌ま忌ましくも思われますが、院の御存命中は、やはり我慢して、あちらのお考えもあつたことでしょうか。この年寄をも、同じようにお考え下さつて、ひどく軽蔑なさいますな。昔からの出家の本願も、考えの不十分なはずのご婦人方にさえ、みな後れを取り後れを取りして、とてもものろまなことが多いのですが、自分自身の心には、どれほどの思いを妨げるものはないのですが、院がこれを最後と御出家なさつた後のお世話役にわたしをお譲り置きになつたお気持ちが生みと嬉しかつたが、引き続いて後を追いかけるようにして、同じようにお見捨て申し上げるようなことが、院にはがっかりされるであろうと差し控えているのです。

気にかかつていた人々も、今では出家の妨げとなるほどの者もおりません。女御も、あのようにして、将来の事は分かりませんが、皇子方がいく人もいらつしやるようなので、わたしの存命中だけでもご無事であればと安心してよいでしょう。その他の事は、誰も彼も、状況に従つて、一緒に出家するのも、惜しくはない年齢になつてゐるのを、だんだんと気持ちも楽になつております。

院の御寿命もそう長くはいらつしやらないでしょう。とても御病気がちにますますなられて、何となく心細げにばかりお思いでいられるから、今さら感心しないお噂を院のお耳にお入れ申して、お心を乱したりなさらないように。現世はまことに気にかけることはありません。どうということもありません。が、来世の御成仏の妨げになるようなのは、罪障がとても

などと、はつきりとその事とはお明かしにならないが、しみじみとお話し続けなさるので、涙ばかりがこぼれては、正体もない様子で悲しみに沈んでいらつしやるので、「ご自分もお泣きになつて、

「他人の身の上でも、嫌なものだと思つて聞いていた老人のおせつかいというものを。自分がするようになったことよ。どんなに嫌な老人かと、不愉快で厄介な思ふお気持ちがつることでしょう」

と、お恥になりながら、御硯を引き寄せなさつて、自分で墨を擦り、紙を整えて、お返事をお書かせ申し上げなさるが、お手も震えて、お書きにすることができない。

「あのごまごまと言つてあつた手紙のお返事は、とてもこのように遠慮せずやりとりなさつていたのでらう」とご想像なさると、実に癪にさわるので、一切の愛情も冷めてしまいそうであるが、文句などを教えてお書かせ申し上げなさる。

「第四段 朱雀院の御賀、十二月に延引」

「参賀なさることは、この月はこうして過ぎてしまつた。二の宮が格別の威勢で参賀なさつたのに、身籠もられたお身体で、競つようなのも、遠慮され気が引けるのであつた。

「十一月はわたしの忌月です。年の終わりは歳末で、とても騒々しい。また、ますますこのお姿も体裁悪く、お待ち受けあそばす院はいかがが御覧になるうと思ひますが、そうかと言つて、そんなにも延期することはできません。くよくよとお思ひあそばさず、明るくお振る舞いになつて、このひどくやつれていらつしやるのを、お直しなさい」

などと、とてもおいたわしいと、それでもお思い申し上げていらつしやる。衛門督をどのような事でも、風雅な催しの折には、必ず特別に親しくお召しになつては、「ご相談相手になさつていたのが、全然そのようなお便りはない。皆が変だと思つたろうとお思ひになるが、顔を見るにつけても、ますます自分の間抜けさが恥ずかしくて、顔を見てはまた自分の気持ちも平静を失うのではないか」と思ひ返され思ひ返されて、そのままいく月も参

上なさらぬのにもお咎めはない。

世間一般の人は、ずつと普通の状態でなく病気でいらつしやつたし、院でもまた、管弦のお遊びなどが無い年なので、とばかりずつと思つていたが、大将の君は、何かきつと事情があることに違いない。風流者は、さだめし自分が変だと気がついたことに、我慢できなかつたのだらうか」と考へつくが、ほんとうにこのようにはつきりと何もかも知れるところになつてゐるとは、想像もおつきにならなかつたのである。

「第五段 源氏、柏木を六条院に召す」

十二月になつてしまつた。十何日と決めて、数々の舞を練習し、御邸中大騒ぎしている。二条院の上は、まだお移りにならなかつたが、この試樂のために、落ち着き払つてもいられずお帰りになつた。女御の君も里にお下がりになつていらつしやる。今度御誕生の御子は、また男御子でいらつしやつた。次々とおかわいらしくていらつしやるのを、一日中御子のお相手をなさつていらつしやるので、長生きしたお蔭だと、嬉しく思はずにはいらつしやれないのだつた。試樂には、右大臣殿の北の方もお越しになつた。大将の君は、丑寅の町で、まず内々に調樂のように、毎日練習なさつていたので、あの御方は、御前での試樂は御覧にならない。

衛門督を、このような機会に参加させないようなのは、まことに引き立たず、もの足りなく感じられるし、皆が変だと思つて違ひないことなので、参上なさるようにお召しがあつたが、重病である旨を申し上げて参上しない。しかし、どこがどうと苦しい病氣でもないようなのに、自分に遠慮してのことかと、氣の毒にお思いになつて、特別にお手紙をお遣わしになる。父の大臣も、

「どうして辞退申されたのか。いかにもすねてゐるように、院におかれてもお思いあそばさうから、大した病氣でもない、何とかして参上なさい」

とお勧めなさつてゐるところに、このように重ねておつしやつてきたので、

「苦しいと思ひながらも参上した。」

「第六段 源氏、柏木と対面す」

まだ上達部なども参上なさつていない時分であつた。いつものようにお側近くの御簾の中に招き入れなさつて、母屋の御簾を下ろしていらつしやる。なるほど、実にひどく痩せて蒼い顔をしていて、いつもの陽気で派手な振る舞いは、弟の君たちに氣圧されて、いかにも嗜みありげに落ち着いた態度でゐるのが格別であるのを、いつもより一層静かに控えていらつしやる様子は、どうして内親王たちのお側に夫として並んでも、全然遜色はあるまいが、ただ今度の一件については、どちらかまことに思慮のない点に、ほんとうに罪は許せないのだ」などと、お目が止まりなさるが、平静を装つて、とてもやさしく、

「特別の用件もなく、お会いすることも久し振りになつてしまつた。こゝいく月は、あちこちの病人を看病して、氣持ちの余裕もなかつた間に、院の御賀のために、こちらにいらつしやる内親王が、御法事をして差し上げなさる予定になつていたが、次々と支障が続出して、このように年もおし迫つたので、思うとおりにもできず、型通りに精進料理を差し上げる予定だが、御賀などと言うと、仰々しいようだが、わが家に生まれた子供たちの数が多くなつたのを御覧に入れようと、舞などを習わせ始めたが、その事だけでも予定どおり執り行おうと思つて、調子をきちんと合わせることは、誰にお願ひできようかと思案に窮していたが、いく月もお顔を見せにならなかつた恨みも捨てました」

とおつしやるご様子が、何のこたわりないような一方で、とてもとても顔も上げられない思ひに、顔色も変わるような氣がして、お返事もすぐには申し上げられない。

「第七段 柏木と御賀について打ち合わせる」

「こゝいく月、あちらの方、こちらの方の病氣に心配でいらつしやつたお噂を、お聞きいたしてお案じ申し上げておりましたが、春ごろから、普段も病んでおりました脚氣という病氣が、ひどくなつて苦しみました、ちゃんと立ち歩くこともできませんで、月日が経つにつれて臥せておりました

て、内裏などにも参内せず、世間とすつかり没交渉になつたようにして家に籠もつておりました。

院のお年がちょうどにおなりあそばす年であり、誰よりも人一倍しっかりしたお祝いをして差し上げるよう、致仕の大臣も思つて申されましたが、『冠を掛け、車を惜しまず捨てて官職を退いた身で、進み出てお祝い申し上げるようなのも身の置き所がない。なるほど、そなたは身分が低いと言つても、自分と同じように深い気持ちは持つていよう。その気持ちは御覧に入れなさい』と、催促申されることがございましたので、重病をあれこれ押し、参上いたしました。

このごろは、ますますひっそりとしたご様子で俗世間のことはお考えにならずお過ごしあそばしていらつしやいまして、盛大なお祝いの儀式をお待ち受け申されることは、お望みではありませんまいと拝察いたしました。諸事簡略にあそばして、静かなお話し合いを心からお望みであるのを叶えて差し上げるのが、上策かと存じます。

とお申し上げなされたので、盛大であつたと聞いた御賀の事を、女二の宮の事とは言わないのは、大したものだと思ひになる。

「ただこのとおりだ。簡略な様子に世間の人は浅薄に思うに違いないが、さすがに、よく分かつてくれるので、思つたとおりで良かったと、ますます安心して来ました。大將は、朝廷の方では、だんだん一人前になつて来たようだが、このように風流な方面は、もともと性に合わないのであらうか。あちらの院は、どのような事でもお心得のないことは、ほとんどない中でも、音楽の方面には御熱心で、まことに御立派に精通していらつしやるから、そのように世をお捨てになつていらつしやるが、静かにお心を澄まして音楽をお聞きになることは、このような時にこそ気づかひすべきでしょう。あの大将と一緒に面倒を見て、舞の子供たちの心構えや、嗜みをよく教えてやつて下さい。音楽の師匠などというものは、ただ自分の専門についてとはともかくも、他はまったくどうしようもないものです。」

などと、たいそうやさしくお頼みになるので、嬉しく思う一方で、辛く身の縮む思いがして、口数少なくこの御前を早く去りたいと思うので、いつものようにこまごまと申し上げず、やつとの思いで下がりになつた。

東の御殿で、大將が用意なされた楽人、舞人の装束のことなどを、さら

に重ねて指図をお加えになる。できるかぎり立派になさつていた上に、ますます細やかな心づかいが加わるのも、なるほどこの道には、まことに深い人でいらつしやるようである。

## 第十二章 柏木の物語 源氏から睨まれる

### 「第一段 御賀の試楽の当日」

今日は、このような試楽の日であるが、ご夫人方が見物なさるので、見がないようにはしまいと思つて、あの御賀の日は、赤い白椽に葡萄染の下襲を着るのであらう、今日は、青色に蘇芳襲の下襲を着て、楽人三十人は、今日は白襲を着ているが、東南の方の釣殿に続いている廊を楽所に、山の南の側から御前に入る所で、「仙遊霞」という楽を奏して、雪がほんのわずか散らついたので、春の隣に近い、梅の花の様子が見栄えがしてほころびかけていた。

廂の御簾の内側にいらつしやるので、式部卿宮、右大臣ぐらいがお側に伺候していらつしやるだけで、それ以下の上達部は簀子で、特別の日なので、御饗応などは、お手軽な物を用意してあつた。

右の大殿の四郎君、大將殿の三郎君、兵部卿宮の孫王の公達二人は、「万歳楽」。まだとても小さい年なので、とてもかわいらしい装束である。四人とも誰彼となく高貴な家柄のお子なので、器量もかわいらしく装束も立派に立られている姿は、そう思つせいか、気品がある。

また、大將の典侍がお生みになつた二郎君と、式部卿宮の兵衛督と言つた人で、今では源中納言になつている方の御子は、「皇じょう」。右の大殿の三郎君は、「陵王」。大將殿の太郎は、「落蹲」。その他では、「太平楽」、「喜春楽」などと言ついくつもの舞を、同じ一族の子供たちや大人たちなどが舞つたのであつた。

日が暮れて来たので、御簾を上げさせなすつて、感興が高まつていくにつれて、実にかわいらしいお孫の君たちの器量や、姿で、舞の様子も、又とは見られない妙技を尽くして、お師匠たちも、それぞれ技のすべてをお

教え申し上げたうえに、深い才覚をそれに加えて、素晴らしくお舞いになるのを、どの御子もかわいとお思いになる。年老いた上達部たちは、皆涙を落としなされる。式部御宮も、お孫のことをお思いになって、お鼻が赤く色づくほどお泣きになる。

「第二段 源氏、柏木に皮肉を言う」

「主人の院は、

「寄る年波とともに、酔泣きの癖は止められないものだ。衛門督が目を止めてほほ笑んでいるのは、まことに恥ずかしくなるよ。そうは言っても、もう暫くの間だろう。さかさまには進まない年月さ。老いは逃れることのできないものだよ」

と言つて、ちらつと御覧やりなされると、誰よりも一段とかしこまつて塞ぎ込んで、真実に気分もたいそう悪いので、試楽の素晴らしさも目に入らない気分にいる人をつかまえて、わざと名指しで、酔つたふりをしながらこのようにおっしゃる。「冗談のようであるが、ますます胸が痛くなって、杯が回つて来るのも頭が痛く思われるので、真似事だけでごまかすのを、お見咎めなさつて、杯をお持ちになりながら何度も無理にお勧めなされるので、いたたまれない思いで、困っている様子、普通の人と違って優雅である。気分が悪くて我慢できないので、まだ宴も終わらないにお帰りになつたが、そのままひどく苦しくなつて、

「いつものような、大した深酔いしたのでもないのに、どうしてこんなに苦しいのであろうか。何か気が咎めていたためか、上気してしまつたのだらうか。そんなに怖気づくほどの意気地なしだとは思わなかつたが、何とも不甲斐ない有様だつた」

と自分自身思わずにはいられない。

一時の酔の苦しみではなかつたのであつた。そのまままことひどくお病みになる。大臣、母北の方が心配なさつて、別々に住んでいたのでは気がかりであると考えて、邸にお移し申されるのを、女宮がお悲しみになる様子、それはそれでまたお気の毒である。

「第三段 柏木、女一の宮邸を出る」

特別の事がない月日は、のんびりと当てにならない将来のことを当てにして、格別深い愛情もかけなかつたが、今が最後と思つてお別れ申し上げる門出であらうかと思つと、しみじみと悲しく、自分に先立たれてお嘆きになるだろつことこの恐れ多さを、とても辛いと思つ。母御息所も、ひどくお嘆きになつて、

「世間普通の事として、親は親としてひとまずお立て申しても、このような夫婦のお間柄は、どのような時でも、お離れにならないのが常のことですが、このように離れて、よくお治りになるまであちらでお過ごしになるのが、心配でならないでしょうから、もう暫くこちらで、このままご養生なさつて下さい」

と、お側に御几帳だけを間に置いてご看病なさる。

「ごもつともなことです。取るに足りない身の上で、及びもつかないご結婚を、なまじお許し頂きまして、こうしてお側におりますその感謝には、長生きをしまして、つまらない身の上も、もう少し人並みとなるところを御覧に入りたいと存じておりましたが、とてもひどく、このようにまでなつてしまいましたので、せめて深い愛情だけでも御覧になつて頂けずに終わつてしまふのではないか存じられまして、生き永らえられそうにない気がするにつけても、まこと安心してあの世に行けそうにも存じられません」

などと、お互いにお泣きになつて、すぐにもお移りにならないので、再び母北の方が、気がかりにお思いになつて、

「どうして、まずは顔を見せようとはお思いになさらないのだらうか。わたしは、少しでも気分のいつもと違つて心細い時は、大勢の子らの中で、まず第一に会いたくなり頼りに思つて居るのです。このように大変に気がかりなこと」

とお恨み申し上げなさるのも、これもまた、もつともなことである。

「他の兄弟より先に生まれたせいでしょうか、特別にかわいがつていたので、今でもやはりいとお思いになつて、少しの間でも会わないのを辛くお思いになつて居るので、気分がこのように最期かと思われるような時に、お目にかからないのは、罪障深く、気が塞ぐことでしょう。」

今はいよいよ危篤とお聞きあそばしたら、たいそううつそりお越しになってお会い下さい。必ず再びお会いしましょう。妙に気がつかないふつつかな性分で、何かにつけて疎略な扱いであつたとお思ひになることがおありだつたでしょうと、後悔されます。このような寿命とは知らないで、将来未長くご一緒にとばかり思つておりました」

と言つて、泣き泣きお移りになつた。宮はお残りになつて、何とも言いようもなく恋い焦がれなかつた。

「第四段 柏木の病、さらに重くなる」

大殿ではお待ち受け申し上げなかつて、いろいろと大騒ぎをなさる。そうはいえ、急変するような病氣の様子でもなく、ここいく月も食へ物などをまつたくお召し上がりにならなかつたが、ますますちよつとした柑子などでさえお手を触れにならず、ただ、冥界に引き込まれていくようにお見えになる。

このような当代の優れた人物が、こんなでいらつしやるので、世間が惜しみ残念がつて、お見舞いに上がらない人はいない。朝廷からも院の御所からも、お見舞いを度々差し上げては、ひどく惜しんでいらつしやるのにつけても、ますますご両親のお心は痛むばかりである。

六条院におかれても、まことに残念なことだ」とお嘆きになつて、お見舞いを頻繁に丁重に父大臣にも差し上げなさる。大將は、それ以上に仲の好い間柄なので、お側近くに見舞つては、大変にお嘆きになつておるおるしていらつしやる。

御賀は、二十五日になつてしまつた。このような時に重々しい上達部が重病でいらつしやるので、親、兄弟たち、大勢の方々、そういう高貴なご縁戚や友人方が嘆き沈んでいらつしやる折柄なので、何か興の冷めた感じもするが、次々と延期されて来た事情さえあるのに、このまま中止にすることもできないので、どうして断念なされよう。女宮のご心中を、おいたわしくお察し上げになる。

例によつて、五十寺の御誦経、それから、あちらのおいでになる御寺で